

全国邪馬台国連絡協議会会報

邪馬台国新聞

発行所 全国邪馬台国連絡協議会事務局
 発行者 鷲崎弘朋
 〒176-0025
 東京都練馬区中村南3-15-4
 Tel. 090-3218-8622
 URL <http://www.zenyamaren.org/>
 E-mail info@zenyamaren.org

会報 『邪馬台国新聞』 第3号の発行によせて

会長 鷲崎 弘朋

「邪馬台国と古代史解明」を旗印に平成二十六年四月に発足した当会は、二年が経過し今年六月の第三回総会では会則(役員任期二年)により役員改選を行う予定で、次のステージに移行します。この四月末の団体会員数は十八団体(所属人員は約一八〇〇〇名。発足時十五団体、個人正会員は二百五十五名(発足時七十五名)、特別顧問は二十四名(発足時二十名)となっております。

当会は、①邪馬台国と古代史解明②地域興し③全国ネットワークをトライアングルの柱として、四支



熊本県上益城郡益城町・朝来山の麓からみた益城町の風景(2014年11月撮影)。朝来山は「あさこやま」と呼ばれているが、『肥前国風土記』によると朝来名峯「あさくなのみね」とよばれていた。上益城郡の弥生時代後期の遺跡からは多数の免田式土器が出土している。益城町は熊本地震で甚大な被害を受けたが、早急な復興を願う。

部体制(東京・近畿東海・中四国・ナニシ)で全国大会・地区大会・会員発表会を開催し、またツアー企画を行っております。主要テーマは、①邪馬台国論「魏志倭人伝など文献や考古学からの位置論」、②邪馬台国前後「邪馬台国前史」邪馬台国「ヤマト王権」、③古代年代論「土器年代等の考古学年代論、日本書紀・古事記等の紀年論、科学的年代論」年輪年代・炭素十四年代・酸素同位体比年代等)、④民族のアイデンティティと古代史、の四項目を掲げております。

当会は、邪馬台国と古代史解明に関心と熱意を持つ有志の英知を結集すると共に、専門家(特別顧問)のご指導をいただく全国ネットワークで、前代未聞の組織であります。この二年間は体制作りを進めてきました。六月総会では四支部体制の強化をより明確に打ち出す予定です。

ただ、最終目標の「邪馬台国と古代史解明」への具体的テーマ設定と切り込みがまだ足りない状況に思えます。これからは、仲間作り・地域興しによる更なる体制作り・ネットワークの強化と同時に、古代史解明への具体的切り込みに取り組み必要があるうかと思われま。平成二十六年十月「第一回全国大会」科学的年代論で解く邪馬台国一では、古代史解明の手段として「科学的手法による古代年代論」を大きな柱として取り上げました。これについても、今後は具体的に切り込んで行く必要があります。また、「第一回狗奴国サミット」沼津(平成二十八年二月)は静岡県沼津市高尾山古墳の保存運動への支援を兼ねたテーマ大会で成功を収めました。こういうテーマ大会も一つのやり方でしょう。財

政はほとんどが個人会員の年会費と寄付金でまかなわれております。年会費は三〇〇〇円ですから、二百五十人で七十五万円になります。このため、全国組織の運営はボランティアに大きく頼っているのが現状で、会員増による収入アップが望まれます。全国大会・地区大会・講演会・会員発表会・勉強会またホームページ・会報・メルマガ・ビデオ映像配信・チラシなどで会員の皆様へのサービス向上に努めると共に、会員募集を進めてまいります。会員の皆様もお知り合いなどに入会を勧められることをお願い致します。もちろん、このためには当会を魅力ある内容(年会費三〇〇〇円を払う価値)にする必要があります。また、全国大会・地区大会・会員発表会・講演会は、①当会の理念・趣旨に沿ったテーマ設定②地域興し③会員発表の場のバランスを考慮するのが大事です。もちろん、個々の大会は①②③のどれを重視するかは個別判断ですが、全体ではバランスが重要視されます。

財政問題と大きく関係するものに法人化(一般社団法人またはNPO法人)があります。当会は①社会的地位の向上②寄付金・公的助成金を獲得し易くするため、法人化を目指しております。今度の六月総会で一般社団法人化を提案したかったのですが、残念ながら見送りました。継続検討とした理由の一つは財政です。法人化すると会計処理や税務面でそれなりの費用が予想されます。現状でその出費が可能か検討中で、その意味でも会員拡大による財政改善が必要で

「初心忘るべからず」と言います。当会の設立趣旨と理念を高く掲げながら、次の第二ステージで目標に向け邁進しましょう。

各支部活動報告

東海・近畿支部活動報告

東海・近畿支部支部長 井上 筑前

当支部は「東海・近畿支部」となっているが、一つの支部としては地域的な範囲が広く、東海と近畿の会員が一堂に会して会合を持つと言う事が物理的にも困難な為、東海地区は新に東海地区担当の副支部長(若井正一さん)にお願いして、私はもっぱら近畿圏の会員諸氏と交流を深めている。会員名簿によれば、東海地方(伊豆、岐阜を含む)の会員が十五名、近畿圏が二十三名、他に福井の方が一名という構成になっている。昨年十月に支部としての初会合を企画した時、東海地区、及び福井の方々には、大阪までわざわざお越し頂くのに気が引けてご案内を差し上げなかった。しかし今でも、差し上げるべきでは無かったかと自問している。従って、ここでの活動報告は近畿圏(大阪・兵庫・京都・滋賀)の会員諸氏の活動報告になっている事を予めお断りしておきたい。

当支部では、前述した昨年十月の第一回会合に加えて、本年一月、三月と会合を重ねた。会議の場は、大阪市が運営する、ユースホステルと一緒にした多目的ホール「コゴブラザ」(新大阪)を利用している。ここは会議場の他に、音楽関係ホール、演劇や踊りの練習場など、幅広い活動に使えるようになってきている。聴衆二百人までくらいの講演会場も備えている。何よりも公営だから料金が安い。周辺の民間の会議場は一時間借りると四、五千円取られるが、ここは会議の場合三時間が一単位で、部屋にもよるが大体千七、八百円である。大阪市民であれば更に安くなるというので、代表者を大阪市民である山科さんをお願いして、第三回からは千五百円程で済んでいる。しかし公営の常で、低料金なので申し込みの人数が高く、まず土日の会議室は満杯である。予約月の4ヶ月前からインターネットで予約を受け付けるのだが、まず

平日以外は部屋の確保は難しい。

第一回は初顔合わせと言う事もあり、自己紹介に終了した。この時の模様は「邪馬台国新聞」の第二号に詳細を記述したのでご参照頂きたい。

第二回は新年会を兼ねて、平成二十八年一月二十二日に開催した。新に二名の参加者があったが、前回のメンバーから二名の欠席者があったので、驚崎会長も含めて総員は同じく十名だった。二名の自己紹介の後、「全邪馬連」の将来及び「東海・近畿支部」の体制、活動等々の議論になった。結論から言えば、

- 一、この支部の活動は当面(二一一年位)、勉強会、研究会を趣旨にした会合とする。
- 二、本部や他支部で行っているフォーラムや講演会などは、慌てて企画しなくてもよい。まずは会員同士の交流を深めて、気運が高まればその後で考えれば良い。
- 三、但し、関西は邪馬台国論の一方の牙城でもあるので、出来れば講演会くらいは開催したい。講師には事欠かない。

という事になった。この後、驚崎会長が中国で見てきたという「三角縁神獣鏡一実見の報告があり、炭素14年代法、年輪年代法にも話が及び、議論の熱さめやらぬまま懇親会場へ移動した。「関西人は初対面からまるで旧知のように呑む」という言葉の通り、二度目の会合であるにも関わらずタメ口が飛び交い、初回同様、終始笑い声の絶えない呑み会となった。

第三回は三月十七日(木)に開催した。新参加者一名の紹介と会員の自己紹介に始まり、本部より要請のあった「副主席長」に飯田真理(まこと)氏を選出した。今回は驚崎会長は欠席されたが、初回の会員も参加して総員十一名であった。その後本部からの連絡事項や、関西支部としての活動(独自HPの立ち上げ等)の提案の後、「魏志倭人伝を読む」とい

う原典に立ち返っての勉強会が始まった。

丹後半島の付け根から参加された伴とし子さんの音頭で魏志倭人伝を読み解いていったが、何と、

「倭人在帶方東南大海之中、依山島爲國邑。舊百餘國、漢時有朝見者、今使譯所通三十國。從郡至倭、循海岸水行、歷韓國、乍南乍東、到其北岸狗邪韓國、七千餘里。」

という部分だけの解釈を巡って一時間半も費やした。「倭国でも無く」「倭」でも無く何故「倭人」なのかに始まって、百余国はどんな状態であったのか、韓国内は陸地を歩いたのか、いや海岸に沿って航海したのだ、などなど。

いかに邪馬台国に関する著書を出した人が多い(中には数冊出した人も)とは言っても、これでは全編読み終わるには数年掛かってしまう。次回は進行の方法を考えようという事になって懇親会へ。例によつての放歌高吟、歴史談義となる。

三回の会合を経て、徐々に会員相互の人となりも分かってきたようだ。ガチガチの近畿説、九州説の人、記紀に詳しい人、漢籍に詳しい人。どこかの掲示板のように罵倒や嘲笑で成り立っている議論では無く、それぞれがお互いを尊重し、真面目で真摯な議論を重ねて行けば、やがて思わぬ成果が上がるかもしれない。今後の勉強会にも期待が持てる。

「全邪馬連」そのものの方向性も、NPO化も含めてまだ未定である現在、関西支部の方向性も当然定まってはいるが、イベント屋を目指す必要性は当然無いし、無理して学界に対する圧力団体になる道を急ぐこともない。

この会を、この支部をどうするのかは我々が決めれば良いのである。好きな道を歩いて行けばいい。おそらくその先に、卑弥呼は優しく微笑んでいる事だろう。

平成二十八年四月二十日

顧問投稿

(アイウエオ順)

見過ごした金印「漢委奴国王」発見の記事

NPOO 法人志賀島歴史研究会 大谷 光男

佐伯有清氏の依頼で、拙著『研究史金印』（吉川弘文館・一九七四年）を上梓した際には、「金印の出土地点」の項目を設けて、従来の諸史料を要約して紹介したが、何れも志賀島村本百姓の甚兵衛の口上書にある「叶の崎」を指すものばかりであった。町立志賀島中学校長であった北島菊蔵先生が蒐集した「続風土記御調子ニ附、調子書上帳」志賀島村の草稿にしても「このところ(叶の崎)より弘(村)にかよふ辺の溝の辺より」とあった。

九州大学の岡崎敬教授(考古学)に訊ねると、「甚兵衛の口上書の通り、かつ近時、大正時代の地図も発見され、これには水田も明記されているので、動かしがたい」と語った。

ところが、先月末に駒沢大学「駒沢史学 第八六号」(平成二十八年三月)掲載の田中弘之氏が「漢委奴国王金印と志賀島」と題する論文を、私に、抜刷で惠贈して下さいました。その金印出土の部分を書いてみる。(一三二頁)。

大正の初め頃、中山平次郎氏が調査した『筑前国風土記附録』(異本、安曇氏蔵)に次のような記述のあることが注目される。

金印を発掘した人物は、金印は「明神の境地より得たる故、神宝とせん事を占ひしに神圖(きゅう)下らざる事再三といふ。故に府廷に呈けしとなり」(中山平次郎「漢委奴国王印の出所は奴国王の墳墓に非らざるべし」『考古学雑誌』五巻二号、六二頁、大正三年十月)。

右の史料によって田中氏は、志賀島村の北隣である勝馬村の「明神の境地」より金印を得たとする。とすれば、平成六年に福岡市教育委員会が『志賀島・玄海島』で、翌七年の遺

跡発掘調査報告書が明らかにしたように、勝馬聚落の「明神の参道の古墳(図)から多くの遺物が出土した。しかし「漢委奴国王」金印の年代が推測できる王莽銭(貨泉)はまだ発

見されていない。この記録によって、さらに発掘調査されることを大いに期待したい。筆を擱くに当って、田中氏に改めて感謝申し上げる。

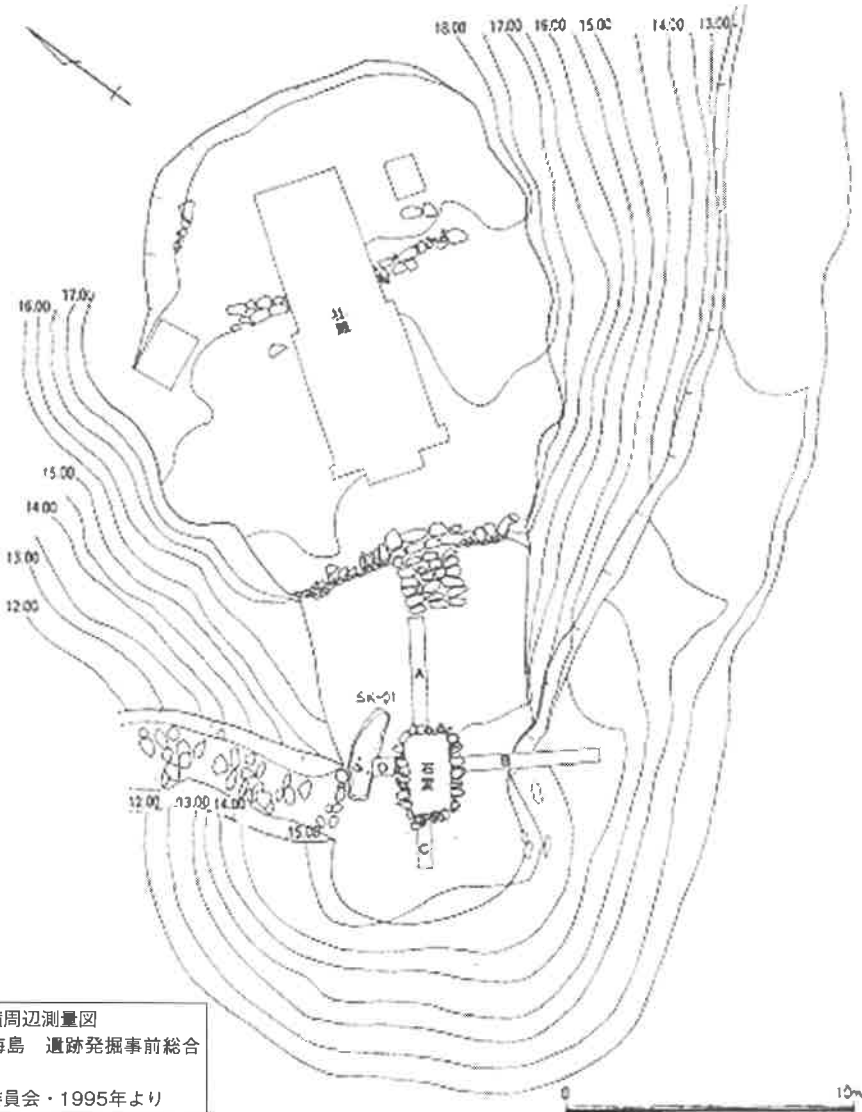


図 中津宮古墳周辺測量図
 (『志賀島・玄海島 遺跡発掘事前総合調査報告書』)
 福岡市教育委員会・1995年より

邪馬台国への夢

明治大学名誉教授 大塚 初重

私立大学の定年七十歳を過ぎ二十年も経過すると欲が無く
なつたというか、智力・体力ともに劣えたのであろうか逆に
物を見る目が広くなり公平化したように思えてくる。

邪馬台国の研究にしても五十から六十歳台の頃は、やれ畿
内だ九州だと位置論をはじめ考古学上の問題を熱血児のよ
うに吼えたものである。ところが九十歳の現在では至極冷静
に邪馬台国論に接するようになってきたように思う。位置論
にしても考古学上、九州だ畿内だと簡単に言えるのだろうか
と自問することが多くなつた。全国各地で膨大な発掘資料が
山積するようになった現在、あらためて克明な資料の再分析
と検討が必要になつてきていると思う。

それにしても「魏志東夷伝倭人条」の記述はどこまでが真
実で確証できるのか、考古学上からは難しい。しかし女王卑
弥呼の魏への献使に係する景初三年(二二九)、正始元年
(二四〇)、正始四年(二四三)、正始六年(二四五)、正始八年
(二四七)という日中外交関係を記す年号が、全く出鱈目だ
とは考えられない。とくに年号などは魏の外交記録文書によつ
たものと思われるので正しい年号と考えてよいだろう。

二世紀末葉から三世紀にかけての邪馬台国全体の動向から
考えると、これらの年月は信じてよいと思われる。従つて邪
馬台国の問題は三世紀中葉前後のことになる。西暦二二九年
から二四七年までの倭人伝の記述内容がやはり問題となる。
魏の皇帝が女王の献使を通じて「親魏倭王」の称号と金印紫
綬と多くの染織品や金・五尺刀・銅鏡百枚などを与えたと記
している。正始元年(二四〇)には魏使が金帛・錦帛・刀・
鏡などをもたらしたとある。これ以後も度たびの往来に多く
の物資が受け入れられたことは事実と見て間違いないであろ
う。これらの事実を考古学上、確証することは難しい課題な
のである。布帛品は腐食するし遺存していたとしても、³か

らの土産品だと確定することは殆ど絶望的である。銅鏡は百
枚とあるが鏡の型式も問題となる。三世紀の中頃に入手さ
れた鏡だから、そのすべてが魏鏡のみとは限らない。その時
代に流布していた中国鏡が含まれていたことは当然である。

日本の弥生時代中期後半の甕棺出土鏡は前漢鏡であるが、
後期段階の出土鏡は後漢鏡が主体である。一九六五年(昭和
四十)から調査が実施されてきた福岡県原市の平原遺跡は、
倭人伝に云う伊都国の国王の墓とされている方形の木棺土壙
墓であるが、四〇面の鏡が発見された。鏡式は方格規矩四神
鏡三二面、内行花文鏡七面と爬龍紋鏡一面であり、調査者の
柳田康男氏によると四〇面中の三八面が仿製鏡であるとい
う。鏡は後漢鏡に属し邪馬台国時代の鏡式が内行花文鏡・方格規
矩四神鏡が主体であったことは事実である。

卑弥呼が魏へ使節を派遣したのは景初三年(二二九)であ
るが、景初三年の紀年銘を有する鏡は一九五〇年(昭和二十
五)に、大阪府和泉黄金塚古墳の中央粘土槨から出土した画
文帯四神四獣鏡があり、一九七二年(昭和四十七)に島根県
神原神社古墳の竪穴式石室から出土した三角縁神獸鏡があつ
て、何れも四世紀代の古墳発見例なのである。一九八六年
(昭和六十一年)には京都府広峯一五号墳からは実在しない年
号の景初四年(二四〇年相当)銘の龍虎鏡が発見され、なお
類例が宮崎県内出土鏡(伝)に一面あるという。

これらの三世紀中葉以前、二二九年〜二四〇年の年号をも
つ鏡は、何れも古墳時代前期後半代の古墳出土鏡であつて、
簡単に卑弥呼が入手した一〇〇面の鏡に該当するとは云い難
い。三角縁神獸鏡については舶載・仿製鏡の両説があり、こ
の論争はなお未解決である。私見では仿製鏡と見ているが、
その論評は別の機会にゆずりたい。

何れにせよ弥生時代後期の遺跡からは三角縁神獸鏡は出土
していない。古墳の出現とくに前方後円墳の出現は布留〇式
期であり、この時期に国産されたものと思う。但し、三³縁

神獸鏡の初期の鑄造に中国鏡製作工人の関係があつたことは
否定したいと考えている。

三世紀中葉頃から古墳出現以前の段階は弥生時代後期でも
後半期であり、その年代は二五〇年頃から二七〇〜二八〇年
頃ではなからうか。土器型式でいえば北部九州では高三瀝式、
瀬戸内地方では上東式、畿内では唐古V様式土器であり、型
式はさらに細分化されているから、各型式の後半期に該当す
るのであろう。近畿地方では纒向式から庄内式古段階にあた
り、東日本では前野町式から五領式古段階に比定されるので
あろう。東国の弥生時代から古墳出現期についての土器形式
を主体とした研究は、杉原莊介先生などの先駆的な研究があ
り、早くから前野町式土器から五領I・II式土器へ、さらに
和泉式土器へという編年観が呈示され問題にされてきた。現
今では多くの新資料が加わり、さらに精緻な編年観が提起さ
れている。加えて東日本では弥生土器や土師器が広く各地に
伝播波及しており、関東地方の出現期古墳からは庄内式土器
や東海系の土器が認められている。近年では静岡県沼津市高
尾山前方後方墳例のように、県内の土師器最古形式である大
廓式I〜IV型式土器が東海系土器とともに多数出土し、その
大廓式土器の分布地域は東北地方南部の福島県会津地方にま
で及んでいる。さらに会津地方には日本海沿岸ルートで搬入
された弥生時代終末期から古墳時代出現期の北陸系土器が存
在している。

古墳出現については畿内・東海系土器の搬入と日本海沿岸
ルートからの北陸系土器とが複雑で多様な人と物の交錯した
社会像を描き出している。各地域の伝統的な地方文化社会の
中で、地域王権の誕生を示すような古墳、とくに前方後円墳
を出現させるような社会のありかたを分析することは簡単な
ことではない。

各地方における多くの発掘調査の成果を見れば、弥生土器
や土師器の他地域への搬入・移動現象が多く見られ、東日本

に限定したとしても広汎な地域間の土器の移動、つまり「八間」集団の地域間交流が激しかったことが想定できる。おそらく村落間の経済的・政治的な動向や環境変動にも影響を及ぼしたことであろう。

三世紀中葉とはいえ既に述べたように弥生時代後期に属し、やがて関東地方でも古墳出現直前の段階にある。魏志倭人伝による年代観によれば邪馬台国時代であり、近畿・東海・関東地方間の年代差が、かつて数十年・百年近くと考えられていた時代とは異なって、各地域間の同時性が強く認識される現今にあつては、邪馬台国論にも大きく影響する。とはいえ東海地方や関東地方が直ちに邪馬台国と直接的な関係があるとは想定しがたいことである。結局のところ北部九州から瀬戸内沿岸と近畿地方が問題の地域であり、さらに近年の考古学の状態からは日本海沿岸の山陰・北陸地方をも含めて再検討すべきだと思われる。

土器型式による分布論のみでなく弥生時代の青銅器・鉄器の分布や出土量も問題にしなければならない。しかしそれにして考古学上からは邪馬台国の位置を確定することは容易ではない。山陰地方における青銅器ととくに鉄製品の出土例の増大は最近の著しい現象として見逃す事はできない。

近畿地方における前方後円墳の出現時期が布留0式という観点からすれば、邪馬台国は弥生時代後期後半から終末期にあたり、土器の移動・拡散現象を見る限り、瀬戸内東部を含めた近畿地方が最も問題とすべき地方ではないかと考える。しかし考古学上から「邪馬台国は此処だ」と確認できることは現段階ではないと思う。倭人伝の記載内容の分析と解釈も重要であるが、将来、必ずや考古学資料の解析から邪馬台国の全容が見えてくる日が訪れるのではないかと確信している。とはいえ夢のような話なのかも知れない。

頭八咫鳥と邪馬台国

歴史作家 関裕二

邪馬台国が分らなければヤマト建国の歴史も明確にならないと言うが、それは逆で、ヤマト建国が分かれば、邪馬台国もおのずと明らかになるのではないだろうか。

「魏志倭人伝」に固執するあまり、『日本書紀』や『古事記』、それに『風土記』と『万葉集』という貴重な「証言」を軽視してきたように思う。日本側の史料に邪馬台国とヤマト建国の歴史を再現するヒントは、ゴロゴロ転がっているのに、「三世紀の歴史は、ほとんど忘れ去られてしまっていた」と、決め付けていたのではあるまいか。逆に、「八世紀の権力者は、ヤマト建国の歴史を熟知していたから、真相を闇に葬るために事実をねじ曲げ、嘘をつき、史実を神話に焼き直してしまった」と考えてみるのも、ひとつの手である。

ヤマト建国のいきさつが、纏向遺跡の発掘によって明らかになってきた。ヤマトは多くの地域からやってきた人々によって築き上げられた連合体であり、強大な王が征服して生まれたものではなかった。そうなると、『日本書紀』の歴史改竄の手法がはつきりとする。

神話の主な舞台は天上界(高天原)と根の国、出雲と南部九州だ。一方、ヤマト建国に深く関わっていたと思われる吉備、丹波、近江、東海(尾張)、そしてヤマトと北部九州は、まったく姿を現さない。これは、不自然なことではないか。意図的な、湮滅としか考えられず、裏返せば、なぜ『日本書紀』編者は、ヤマト建国の歴史を隠そうとしたのかを探っていけば、思いのほか簡単に、邪馬台国の謎も、氷解するのではあるまいか。

筆者は『日本書紀』やその他の文書を摺り合わせ、また考古学の物証を重ねて、『日本書紀』によって消し去られた重要な地域の末裔がだれなのかを、探ってきた。その結果、前方後円墳の原型を弥生時代後期に作り上げてきた吉備は物部

氏の祖(ニギハヤヒ)、東海(尾張)から大量の土器をヤマトにもたらしたのは尾張氏の祖と考えるようになった。出雲の国譲りの切り札になった経津主神と武甕槌神は、それぞれ物部系、尾張系という指摘があり、ヤマト建国後の主導権争いで、出雲と北部九州連合が敗れ、吉備(物部)と東海(尾張)が勝利したと推理する。

神武東征以前、ヤマトを支配していたのはニギハヤヒで物部系だが、実在の初代王・第十代崇神天皇の母と祖母は物部系だったと『日本書紀』は言う。黎明期のヤマトで、物部氏が重要な役割を担っていたことは、間違いないし、筆者は崇神天皇は「神武を迎え入れたニギハヤヒそのものではないか」と疑っている。通説は初代神武と第十代崇神天皇を同一人物とみなすが、実際は、同時代人だったと考える。崇神の母と祖母が物部系といっているのは、暗示であろう。

そしてもうひとつ、最近気付いたことをメモしておく。神武東征の場面で、紀伊半島の深い森に迷い込んだ神武一行を、頭八咫鳥が導いたと『日本書紀』は言う。頭八咫鳥の末裔は「カモ氏」だが、その出自は謎のままだ。

『山城国風土記』逸文に、カモ氏の祖・賀茂建角身命が丹波の神・伊可古夜日女を娶って、玉依日子と玉依日売が生まれたとある。この「ベタ記事」、無視できない。

カモ氏をはじめ葛城にいて、そのあと木津川周辺(京都府と奈良県の県境)に拠点を構え、山城(京都府南東部)に勢力を広げ、下鴨神社や上賀茂神社の神官になった。南から北に移動したと信じられているが、『山城国風土記』の記事をみて、「逆ではないか」と思うようになった。崇神天皇が物部系と考えられるように、「丹波の女神」を娶った賀茂建角身命も、丹波出身と考ええると、いろいろと合点が行く。

纏向遺跡が登場した頃、近江と東海には前方後円墳(前方後円墳ではない。念のために)が造られ、前方後円墳よりも早く、各地に伝播していった。またこの直前の弥生時代の終

わりごろ、近江には巨大な環濠集落・伊勢遺跡(滋賀県守山市)が出現していた。この一帯は、鉄の過疎地だったが、急速に発展していたのだ。どうやら、丹波が朝鮮半島との間に独自のルートを開拓し、出雲や北部九州に対抗し、琵琶湖を経由して、先進の文物を流しはじめていたようなのだ。すると、纏向に集まった土器の過半数が、近江と尾張のものだったという事実は、無視できなくなる。ヤマトを「東」の勢力が陣取れば、厄介なことになる。だから吉備は、慌ててヤマトにやってきた……。そういうシナリオが思い浮かぶ。各地の首長が奈良盆地に注目し、「この指止まれ」をするように集まってきたのは、「丹波の暗躍」と関係がある。

「丹波出身のカモ氏」の山城進出は、地勢上の必然でもあろう。丹波から川を下れば、嵐山に出る。嵐山からさらに川を下れば、巨椋池(現在は消えてしまった)を経由して、淀川、そして、木津川に出られる。木津川と言えば、カモ氏の拠点のひとつだった。また、丹波から琵琶湖を経由して川を下れば宇治に出て、その前が巨椋池だ。つまり「丹波と水運でつながる場所」をカモ氏はおさえていたことが分かる。

丹波を起点にして、巨椋池というジャンクションを頭に描けば、カモ氏の壮大な「天下取りの図式」が読み取れてくる。ただし、ここが不思議なところなのだが、丹波地域の人びとは、表舞台に出ようとしなかった。「影から操り、隠然たる勢力を保ち続ける」ことが得意だった。

おそらく、『日本書紀』に登場した頭八咫鳥とは、そのような丹波出身のカモ氏をモデルにして創作された霊鳥なのだろう。

なお詳細は、拙著『ヤタガラスの正体』(廣済堂新書)を参照していただきたい。

ますます遠ざかる銅鐸と邪馬台国

埋納の開始は紀元前二世紀初頭までさかのぼる新説提唱——
権原考古学研究所 纏向学研究中心 共同研究員 森岡 秀人

銅鐸に関心のある方は多いと思います。私も一九七五年には銅鐸の埋納に関する小論文を書いています(銅鐸と高地性集落『首の井』一七)。そこでは、銅鐸の生産地と祭祀地と埋納地は三場所が別になる可能性があり、銅鐸が海路などを用いて遠隔地に運ばれたことを力説しています。近畿の周辺部、農耕のマツリのないような可耕地の乏しい場所にも数多くの銅鐸が埋められている事実、そのアンバランスを不思議なことと受け止めたからです。と同時に、銅鐸の埋納は大きく見て二段階あったことを初めて提唱しています。当時有力であった小林行雄説は、弥生社会の終焉に新しい国の建設、発足を記念して、ムラムラの銅鐸は一つの場所に集められ、埋められて、農耕社会と訣別したと考えられていました(『古墳の話』一九五九年、『女王国の出現』一九六七年)。私は中期末と後期末の激変期通過という弥生時代の画期の研究の進展状況も受けて、大規模協業の主体となった農業共同体は発展、継続せず、中期の終わり度一度解体し、途中で銅鐸の生産・消費の仕組みもその祭儀の目的・方法も著しく様変わりすると考えました。その後は、この二段階埋納説をさらに根拠を加えて数多くの研究者が唱えるようになりました。

一方、弥生時代後期が三世紀と推定された頃は、銅鐸は弥生社会の産物として卑弥呼の時代とも十分触れ合うものでした。銅鐸から銅鏡への転換は、倭国の意向とも関わって三世紀史の中で理解できるものです。しかし、その後の年代研究の歩みは急速に変化を遂げ、私や寺澤薫さんは弥生時代後期を一世紀前半や後半の段階でスタートしたと捉え、その終りも三世紀の初頭に修正します。その次には庄内式土器を使う時代が到来し、銅鐸はこの時期、壊されていくのが目立ちます。卑弥呼治世の全盛期には銅鐸は衰亡したとみられらるうになりました。私は近年、庄内式開始年代を一七〇〜一八〇年頃にかけて考えており、近畿の第V様式系土器は倭国乱頃を契機に庄内式と伴出し、やがて解体していくと睨んでいます。

しかし、最近になって庄内式土器はもっと古く、紀元二世紀前半には出現し、纏向遺跡の成立もその頃だと主張する研究者が目立つてきました。岸本直文さんや赤塚次郎さんを筆頭とする数名の研究者たちで、AMS法炭素年代測定や樹木セルロース酸素同位体比年代測定を要とする科学年代を採用した実年代観です。庄内〇式や廻間一式初頭の年代が紀元一二七〇年と特定されることもままあります。一方で同じ土器の年代を四世紀前半まで下降させる関川尚功さんのような守旧派も健全ですので、土器型式の境界想定年代は大変錯綜しているのが今日的状況です。銅鐸の使用年代、とくに突線鈕式段階の銅鐸もスライドして古くなる可能性が出てきたことになりませんが、銅鐸も土器も直接実年代は保持せず、埋納年代や土器使用中の具体的年代は常に不分明です。

昨年、淡路島南部の松帆というところから銅鐸が七口出土し、銅舌も七本伴出しました。その組成は菱環鈕二式一口、外縁付鈕一式六口と古いものであり、入れ子三組六口はそれぞれ銅舌を伴い、その埋納姿勢も鱗を上にする方式とは考えにくいものでした。舌の型式分類も母数が増えた分可能となり、二〇センチクラス用のものと三〇センチクラス用のものとが存在するようです。近傍には中の御堂銅鐸出土地があり、江戸時代前期に八口が発見され、日光寺に伝わる一口は既に銅舌を伴っており、淡路南部での集中があらためて注目されます。さらに今回松帆二号鐸・四号鐸と日光寺所蔵鐸は同范関係が判明し、この地域での偏在が意味あるものとなつてきます。私の感触では、中川原鐸(龍泉寺所蔵)の菱環鈕一式から松帆一号鐸への初期銅鐸の工人系譜が特徴的に追え、最古段階の銅鐸生産は淡路の三原平野で行われたことを推測

しています。金属原料や文様の入れ方、鐸身の反りが「」視より側面観の方から明確化していくこと、その厚さからくる高さ以上の重量感……等々。二つの銅鐸の間でDNAは確実に受け継がれていると判断します。

これらの銅鐸は、撚り紐で吊り下げられ、振り子となっていた銅舌は組み紐を使用して銅鐸から提げ振られたようです。使われ方の諸条件を満たす完全な聞く銅鐸の仕来たりを保ったままの埋納であり、私は全国でこれこそ最古の大量埋納が行われたと考えています。従前の説では、紀元前一世紀末から紀元一世紀前半頃の年代で理解されてきたわけですが、その年代は実際もっと古く、紀元前二世紀最初頃と推定しています。この時期は瀬戸内から近畿にかけての地域で凹線文を施す弥生土器が誕生し(四様式の第一小様式)、急速に波及します。内陸部でこの時期から始まる環濠集落などもあり、同時に一方では廃滅する大型集落も存在するので、弥生社会の画期としても注目すべき時期です。銅鐸埋納の初発段階をここに置くことによって、その多段階の埋納を容認することになります。

卑弥呼の時代より約四〇〇年古い時期における銅鐸の埋納。その想定が正しければ、邪馬台国とはますます遠い出来事となり、長い時間にわたって銅鐸を埋納する祭儀の伝授をいかに保ったかが大きな謎となります。その最古段階の埋納年代は、複数の炭素年代測定値に委ねられる部分も多く、考古学的な情報だけでは如何ともし難い状況です。その発表が心から待ち望まれます。この新聞第三号を読まれたみなさん。ぜひ真剣に考えてみてください。

古代年代と計測

考古学を科学する会 主宰 藤盛 紀明

二〇〇三年三月に「考古学を科学する会」を立ち上げ、二〇一五年一〇月に第六六回の例会を行った。第六六回のテー

マは「考古学と科学の視点から旧石器捏造事件を振り返る」であった。会の中心テーマは「古代鉄」「放射線炭素年代測定(C14年代測定)」「年輪年代法」「古代尺度」「DNA分析」などであった。初期のメンバーに製鉄会社の研究所長や鉄の販売担当者が複数名参画していたので初期のテーマは鉄関連が多かった。その後、科学的年代測定法や古代尺度、更にはDNAが中心議題となり、新井宏氏や鷲崎弘明氏等の論客が熱論を展開した。鷲崎弘明氏を中心として立ち上げた「全国邪馬台国連絡協議会」の中心テーマの一つが「古代年代論」であることは喜ばしいことである。

筆者は「考古学を科学する会」で検査・計測の基本について繰り返し語ってきた。近年は歴史の実年代推定に「科学的年代法」として「放射線炭素年代測定(C14年代測定)」や「年輪年代法」が大きくクローズアップされ、歴史の実年代推定が従来よりも古く推定されるようになってきている。筆者の懸念は考古学者が「科学的」と言う事を鵜呑みにして、新しい測定結果をそのまま信じる傾向のあることである。筆者が繰り返し語ったことは、測定には(一)誤差、ばらつきが付きまとう(二)測定すると言う行為そのものが虚偽を産むことがある。更に言わずもがなのことであるが「科学」とは以下のようになければならぬと強調してきた。(一)反証可能性を備えるものである(二)論文において著者は、同じ分野を研究する者がその研究を再現したり、検証・評価しうるに足る情報を提供し、論証の過程を示さなければならぬ。(日本建築学会倫理規定)

旧石器捏造事件では地層年代判定等の科学的・技術的手法が捏造行為の一助として利用された。年輪年代法は上記の日本建築学会倫理規定に大きく違反している。C14年代測定法では測定誤差・ばらつき認識が不十分のまま、結果が一人歩きしているように思われる。

最近杭打ちデータ捏造が連日新聞・TVで取り上げられて

いる。その際掘削時の負荷電流値のグラフの流用が議論の中心になっている。しかしながら土木学会の研究報告によれば負荷電流値は地盤の固さと必ずしも連動せず、支持地盤到達確認には不十分であるとされている。負荷電流の積分値、地盤のN値(固さ)分布、掘削機の回転速度変化など総合的な判定が必要とされている。一つの測定データへの依存が大きな過ちを招いているように思われる。

日本国の始まりでは邪馬台国の時代の考古学的実年代が最重要テーマである。全国邪馬台国連絡協議会が掲げたテーマ「古代年代論」の発展を期待すると同時に、筆者も微力ながら参加していきたい。

考古学における「研究不正」の構造

邪馬台国の会 主宰 安本 美典

学問上の研究不正のなかに、「利益相反」にもとづくものがある。つぎのようなものである。

たとえば、医学研究者は、人の生命の安全をはかる職業上の義務がある。ところが製薬会社が、研究者に多額の研究資金を提供しているばあい、その製薬会社の薬がとくに有効であるかのように臨床研究のデータが上げられることがある。製薬会社は、上げられた情報により、この薬は、とくにききめがあるという宣伝を行なうわけである。

同一の研究者のなかに、人の生命の安全をはかるという義務と、研究資金を今後も獲得したいという気持と、「利益が相反する形」になるのである。その結果、研究不正がおきる。有名なものに、ノバルティスによる研究不正事件がある。この事件には五つの大学の研究者が関係した。これについては黒木登志夫著『研究不正』(中公新書、中央公論社、二〇一六年刊)、河内敏康・八田浩輔共著『偽りの薬』(毎日新聞社、二〇一四年刊)などにくわしい。

これは、ノバルティス社が、自社の降血圧剤ディオパンの

売り上げをのぼすために行なわれたものであった。ノバルティス社にとって、驚くほど素晴らしいデータが、創出されることになる。その報告が権威のある学会誌にのった。しかしそのデータは操作されていた。

二〇〇六年には一〇〇億円あまりであったディオバンの売りあげは、二〇〇九年には一四〇〇億円となった。

ノバルティス社からは五つの大学へ、合計十一億円以上の奨学金寄付金が行なわれていた。

考古学の分野でも、「利益相反」にもとづく不正があるようにみえる。

各県などの行政担当の考古学研究者は、一方で、学問的科学的に正しい結果を報告しなければならない社会的義務がある。また一方で「地域おこし」の一端をになう義務がある。給与や調査研究費なども、県ごとなどの行政から支給されている。

その立場から、どうしても、地域の振興のほうか、学問的科学的理念よりも、優先されやすいことになる。

『読売新聞』の記者であったジャーナリストの矢沢高太郎氏はのべている。

「新聞やテレビで大きく報道されることによって社会的な関心が高まり、遺跡の生命が守られたケースは多い。しかし、同時に弊害もまたさまざまな形で発生した。学者にとつては、地味な論文を発表する以前にマスコミで大々的に取り上げられるほうが知名度も高まり、学界内部での地位も保証される傾向が強まった。一部の学者や行政の発掘担当者はそれに気づき、狡知にたけたマスコミ誘導を行なってくるケースが多々見られるようになってきた。その傾向は、藤村氏以外には、考古学の「本場」である奈良県を中心とする関西地方に極端に多い。そして、発表という形をとられると、新聞各社の内部にも何をおいても書かざるをえないような自縄自縛（じじやくじじやく）の状況が、いつの間にか出来上がってしまった。そんなマ、コミ

の泣き所を突く誇大、過大な発表は、関西一帯では日常化してしまっている。藤村(新一)氏は「事実の捏造」だったか、私はそれらを「解釈の捏造」と呼びたい。(旧石器発掘捏造『共犯者』の責任を問う)『中央公論』二〇〇二年十二月号)

マスコミは、正確さよりも、センセーショナルリズムを重んずる傾向がある。学会での検討以前に、マスコミでの発表を重視するのは、学問や科学の発展にとって、好ましいことではない。

「狡知にたけたマスコミ誘導」、「誇大、過大な発表」は、ほとんど「捏造」に近くなる。

研究者、発掘担当者じたいは、善意の人たちなのである。発掘や個別事実の把握は、正確なのである。しかし、しばしば、無意識のうちに、あるいは、意識的に、地域に有利なように解釈がまげられる。

組織集団がある方向にむいているばあい、その内部にいる人たちには、組織集団の文化の特異性に、気づきにくくなる。思い込みと、あるていどの論証の粗雑さとがあれば、どのような結論でもみちびきだせる。

当然見えるべきものが見えず、見えないはずのものが見えるようになる。

さきに紹介した黒木登志夫著『研究不正』では、二〇一二に、ある麻酔科医のおこした一連の捏造事件については、つぎのように記す。

「学会とジャーナルは積極的に自浄能力を発揮した。特に、日本麻酔科学会の報告書は、今後のお手本になるであろう。」

これに対して、旧石器捏造事件については、つぎのように記す。

「日本考古学会協会は、検証委員会を立ち上げたが、ねつ造を指摘した竹岡(俊樹)と角張淳一は委員会に呼ばれなかった。ねつ造発見の十日前に発行された岡村道雄の『縄文の生活誌』は、激しい批判にさらされ回収された。しかし、

岡村は、責任をとることなく、奈良文化財研究所を経て二〇〇八年退官した。」

「SF(藤村新一)のねつ造を許したのは、学界の長老と官僚の権威でもあった。その権威のもとに、相互批判もなく、閉鎖的で透明性に欠けたコミュニティが形成された。」

竹岡俊樹氏じたいも、その著『考古学崩壊』(勉誠出版、二〇一四年刊)のなかで、つぎのように記す。

「私たちがさらに情けないと思うのは、発覚の後の対応である。自らの行ってきた学問に対する反省はまったく行われなかった。藤村というアマチュアや、文化庁(岡村)に責任を押し付け、その上、批判する者を排除しつづけた。検証は名譽職が好きな『権威者』たちによるパフォーマンスにすぎず、生産的なことは何も行われなかった。」

「この十数年間待っていたが何も変わらなかった。」この学問が存続していくためには、失敗した検証作業にもとつて、もう一度やり直すことが必要である。」

考古学の組織じたいが、自浄作用のききにくい構造となっているのではないか。容易に不正のおきやすい構造になっているのではないか。

捏造をひきおこす個人、組織、文化は、捏造をくりかえす傾向があるといわれている。

このようなことを書けば、行政の担当者の方などからの、反撥もおきるであろう。

なくなられた考古学者の森浩一氏が、考古学は、町人の学問であるべきであることを説き、官による考古学を批判したのは、このようにところに原因がある。

森浩一氏はのべている。

「今日の政府がかかえる借金は、国立の研究所などに所属するすこい数の官僚学者の経費も原因となっているだろう。」
「ぼくはこれからも本場の学問は町人学者が生みだすだろうとみている。官僚学者からは本場の学問は生まれそうもない。」

(以上、『季刊邪馬台国』一〇二号、梓書院、二〇〇九)もろろん、吉野ヶ里遺跡のような行政による発掘で、また行政にしかできない発掘で、きわめて価値のある発掘も、すくなくないのであるが。

会員投稿 (アイウエオ順)

安本美典VS西川寿勝 三角縁神獸鏡の真贋論争

原秀三郎氏の「狗奴国サミット」での講演を聞いて

—偽書贋作をどうやって見抜くか、古代史研究の科学的方法論はいかに—

二〇一六.三.九 東京都会員 尾関 郁

本年一月二十四日の「邪馬台国の会」で、中華人民共和国で初めて見つかつたとされる三角縁神獸鏡の真贋をめぐる西川寿勝氏と安本美典氏とのあいだで激しい論争が戦わされました。

現地に行つて見てきた西川氏は鏡のキザミや鍔の具合で本物と認めたのに対して、安本氏は中華人民共和国では今まで一つも出ていないので統計上、本物とは認められないということ。そして、発掘場所が明確でないし、国土資源局長で共産党党組書記の王趁意氏はレプリカ作りが盛んで博物館もレプリカを本物として掲示している国の骨董市でこの鏡を得たのだから極めて怪しい、と付け加えました。さらに、前のレプリカが偽物と鑑定された所見を克服してより巧みな贋作を作っており、目では判別しにくいので材質の同位元素を調べる必要があるが、西川氏にその鏡を貸すのを拒んだのは王氏が分析を恐れたのであろう、とも述べました。この論争の中で西川氏の見れば本物とわかるとばかりにたびたび安本氏に中華人民共和国行きを勧めました。

『人はいかにして認識し得るのか』、これは哲学の長年の命題です。認識とは『客観と主観の一致』であり、認識論には

経験による認識と理性による認識の二つに分かれます。前者を経験主義と呼び、視覚や触覚などの感覚器官を通じて認識するもので、後者を理性主義と呼び、論理学や統計学(確率論も)などを用いて頭脳で認識するものです。西川氏は経験主義の立場、一方安本氏は理性主義の立場をとつたと見受けられます。経験主義と理性主義も一方だけで十分認識できる場合もありますが、それでは誤謬「客観と主観の不一致」を生じやすく、双方のコラボレーションが大事だと思います。もし、これまで一つも発見されていないとの理由で贋作と断定しますと、本物を贋作にする逆捏造の危険が僅かでもあり得ます。ですから蓋然性の高さを述べることでいいでしょうか。

二月十三日、沼津に行き、話題の「高尾山古墳」を見てから全邪馬連主催の「狗奴国サミット」に参加しました。講演者の中で原秀三郎氏(静岡大名菅教授)の「高尾山古墳に葬られたのは誰か」と題した講演の最後で違和感を覚えました。それは「古典の語るところを素直に読んで」と述べたからです。科学は疑問、すなわち疑ることから始まるのではないのでしょうか。つまり、彼はこれまで科学をして来なかつと自白していることになりす。もし、素直に受け止めてしまったら贋作も偽書も見抜けません。

世に偽書または怪しいと言われている古文献があります。先代旧事本紀、神傳富士古文献大成(宮下文書)、神領契丹古伝、范曄の後漢書、房玄齡の晋書、山海経、海東諸国記など(東日流外三郡誌は古文献ではない)は注意が必要でしょう。房玄齡の晋書を史通の撰者劉知幾は「怪しい搜神記を引用しているから怪しい」としていますので、「正史」といっても正しさを担保していません。

そこで偽書または怪しい箇所を見抜く術を伝授しましょう、と申し上げたいのですが残念ながら未熟な筆者にそのような心得を持ちようがありません。ただ、一読して信じるのは危険ということと、誤謬を可能な限り防ぐには①引用・参考文

献を調べる②同時代を記述している他の文献との整合性をみる③考古学との整合を考察することぐらいしか言えません。そこで幾つか古文献に触れてみましょう。

後漢書は范曄のほか六人、後漢記は四人が書いており、晋書はなんと十一人が書いています。晋書は房玄齡の撰が一般的ですが、中華書局の出版本は文皇帝の撰となっています。本当に皇帝自らが撰したのでしょうか。新唐書の芸文誌には文皇帝撰の書が記載されておらず、もし房玄齡の書を修正して文皇帝の名で出版したならば文皇帝は墓の中でビックリボン、いや問題なのは中華書局が捏造者ということに……。

日本書紀については、隋書、唐書および新唐書の倭に関する記述を通して読みますと西暦七〇〇年以前の記述はかなりデータラメということがわかります。そして「日本大和朝廷」の使者が自ら六〇〇年(本当は七〇〇年)以前は中国大陸と通じていないと述べているのですから、女王国を関西で、また倭の五王を日本書紀の中で捜すのは徒労です。

神領契丹古伝は浜名寛祐が神領叙伝を種本として書いていますが、原本も撰著者も出自も、さらに原本と一緒に見たとする広岡某と目撃場所も不明で偽書の要件がたっぷり揃っています。原本の引用文献は検索しても出ないので引用文献からすべてが彼の作りごとかもしれません。しかしながら、安部裕治著「辰国残映」によると他の文献や考古学との整合性があるようです。皆さんが「辰国残映」を、そして葉隆社撰「契丹国志」も読まれて検証することを望みます。

三国志について古田武彦は「陳寿は正しい」と言い切っており、逆捏造の疑いがあります。三国志は陳寿が七十冊、裴松之が四五〇冊の文献を参考・引用しており、それらのすべての文献の記述が正しいなどどうして簡単に言い切れるのでしょうか。彼はまた、転写本であれそこに書いてあることを受け入れる旨を述べていますが、それでは疑問点の追究を止めて陳寿教の信者になることで賛成できません。もつとも

「臺」「壹」論争は、「イ」の音借・音写文字とすればどちらかを間違えとは断定できないでしょう。「耶麻堆国」しかり。ただ使用する際は「〇〇書でいう」とか「本書では△△を使う」なる断りを入れておくことが望ましいと思います。

たとえ間違いや怪しい個所があったとしても、それをもつて偽書と断定したり、アクセスを避けたりするのは勧められません。なぜなら、その中に真実が隠れているかもしれませんし、朝鮮総督府の検印付きの海東諸国記のように別の歴史の断面を示す場合がありますから。

自分の作品を含めてすべてを疑って、真実に近づくように楽しみながら科学的に蓋然性を高めていきましょう。

読後感想

三世紀・三国時代 江南出身の卑弥呼と高句麗から来た神武

小林憲子著現代思潮新社刊 古代史は文学か社会科学か

二〇一六・三・九 東京都会員 尾関 郁

本書は①三次に及ぶ神武東遷②分裂した月氏国の分派による奄美大島での邪馬台国の建国と北九州から奈良への移動あるいは朝鮮半島での月支国建国、を根幹としています。その壮大な視野と奇抜な発想と大胆な創造には感服しました。

二〇一五年、NHKが「奄美は神の国」や「久高島は降臨の地」という伝説を報じたように本書には所々その根拠を窺わせる記述があります。しかし、証明や合理的な説明が不足しており、或る事柄からどんどん展開していく物語としか感じられませんでした。読後、文学での「創作」は社会科学では「捏造」と同義語になることを思い起こされました。

私は新しく手にした本の、はじめに・目次・参考引用文献・おわりに、を見てから本文を読むようにしています。それは著作のレベルや欠陥・特長・目的がわかって読む判断基準になるからです。

本書は著者が述べているように最近の文献を読まな、のが

欠点の根拠と思われま。中でも契丹古伝と海東諸国記(これらは最近の文献ではないが)を読んでいないのが残念です。

古代の文献は物語か史実なのかよくわかりません。そのせいかそれらは「文学大系」として出版され、また大学の歴史科の多くは文学部に属しています。文学部ではウエーヴァーの社会学方法論やデュヴェルジェの社会学方法論に触れることはないのではないかと推察します。なぜなら文学部出身の作者は実証志向が弱いせいか著作は主観に基づいていたり(たとえば三国志を検証せずに一里を九〇または四三五メートルとする)、一つの視点だけの考察で断定しており、仮説として認め得るか、物語なのか判明できないものが少なくありません。そして自分の作品に関する批判を素直に受け入れずに頑な態度を示し、あるいは感情的に反発し勝ちです。そこに日本の歴史学の発展を阻害する要因の一つがあるのではないかと懸念するところです。

チヨーおもしろい参考・引用文献ウオツチング

二〇一六・三・九 東京都会員 尾関 郁

のつけから失礼ですが、お尋ねいたします。

第一問、三国志の参考・引用文献は何冊ですか？

この数を示している文献は私が目を通した中でたった一冊、渡邊義浩(早稲田大・大学院教授)著「三国志入門」だけでした。二・三〇冊と。でも私が既にカウントしていたのは、多少漏れがあるかもしれませんが陳寿が七〇冊、裴松之が四五〇冊です。合計は五二〇、いえ両者共通のものがありますからそれより少ないのです。なにも渡邊義浩氏の数との違いを強調したいのではなく、この数のおもしろさを述べたいのです。これらの文献を分けてみますとA、陳寿が提示したが、裴松之は提示していない該当する文献は①裴松之は知らない②裴松之は知っていたが目を通していない③裴松之は目を通したが意図的に記述しない、または記述を漏らした④裴松之

が知る前に既に紛失・滅失した、という四通りあります。さらに紛失したものが発見されるものと発見されていないものに分かれます。

B、陳寿が提示していないが、裴松之は提示した

該当する文献は①その文献が陳寿時代に存在していたが陳寿は知らない、知っていたが目を通していない、目を通して意図的に記述しない、または記述を漏らした②陳寿時代に行方不明だったが、裴松之の時代には発見されていた③陳寿の死後、裴松之の時代には書かれた、という三通りあります。

C、両者が提示した

これは①陳寿の前に書かれており、裴松之の時代まで存在していたが、その後滅失、行方不明②陳寿の前から今日まで存在、という二通りあります。

D、両者が提示していない

①陳寿の前に滅失、ずっと行方不明②陳寿の前に行方不明になり、陳寿の死後に発見されるが裴松之が知らない、目を通さない、しない、記述を漏らした、③二人の時代に行方不明だったものが発見される④二人の時代に存在したが双方が記述しない⑤裴松之の死後に書かれた、という五通りが考えられます。

これらからその文献の書かれた年代が大雑把に判ると思われます。

ところで三国志の中に赤壁の戦いで曹操軍が揚子江を二里後退したという記述がありますが、これは裴松之が「江表伝」から引用したもので、故古田武彦氏は「陳寿は正確だ」と述べているのは氏が三国志をよく読んでいないことを示しています。「魏晋の時代は短里だ」という記述がありますが、引用文献が書かれた年代を調べないで述べるのは暴論になってしまうのではないのでしょうか。ぜひ皆さんにそれらの年代を調査していただきたく思っています。

第二問、翰苑ではどの引用文献が一番多いですか

翰苑における雍公叙の注釈に出る三一の引用文献名「本軸、倭国を含む東夷一〇国を縦軸として引用回数調べてみました。すると一番多く引用されている文献が范曄撰の(外に袁崧、華嶠、謝承、謝沈、牧魏、劉義慶らが撰)後漢書が一〇か国五一個所、字に多いのは漢書一五か所、だが匈奴にほとんど集中、また引用の多い国は高麗で三一個所、一七種の文献、次は匈奴で三〇個所、五種の文献となっています。倭国は九個所、六種の文献で少ない方から三番目です。つまり重要視されていなかったのですね。

いかがでしょうか？ 他に調べた引用文献は山海経と神頒契丹古伝。もちろん現代の著作も調べていますよ。古代文献リストと古代史に関する著者・著書リストとともに全邪馬連の図書館に寄付してあります。皆様のお役に立てれば幸いですし、皆様が追加してより充実したものにしてくださいね。お願いします。

熊本地震と狗奴国

九州の歴史と文化を楽しむ会長 神奈川県会員 菊池 秀夫
今年の四月に益城町付近を中心として震度七の地震が発生した。しかも二回もある。狗奴国の中心地を益城町付近と想定した私は、熊本在住の中原会員と二年前に当地を訪れたことがある。その益城町がこのような災害にあうとは思っていません。被災地の方にお見舞い申し上げます。

自説では、熊本県中南部の狗奴国が鹿児島県の隼人や宮崎県原ヤマト王権の勢力と結合して九州北部の女王国連合を破り、畿内へと東遷したという仮説を考えた。

この内容は、地震発生の二ヶ月前の「第一回狗奴国サミット」で発表した。(資料集八十五ページ)自説によれば、益城町付近は日本国の起源の場所となる。つまり日本の国のふるさとといえる重要な場所なのである。あくまで仮説ではないが、現地の方々には、復興に向かってがんばっていただきたい

と願っている。

邪馬台国問題解決の鍵は【倭国報告書】

大分県会員 兒玉 眞

陳寿は『魏志倭人伝』を書くにあたり、晋宮廷の資料室に保管される【倭国報告書】を参考にしたと思われます。

景初二年(A.D.二三八)卑弥呼は魏に遣使しますが、景初三年(A.D.二三九)正月の明帝の死によりその年喪中となった魏は、倭国に正使を派遣できなくなったので、同年帰還する倭使を送還するに際し、倭国調査隊を兼ねた仮の使節団(郡使)を組織し、帯方郡から倭国へと派遣したもようです。

だから魏が正使の梯僞を派遣するのは、明帝の喪中の開けた正始元年(A.D.二四〇)となります。梯僞はこの年実際に倭国の首都邪馬台国に詣で、倭女王卑弥呼に謁見しています。ところで伊都国は『魏志倭人伝』に「郡使往来常所駐」と記されます。景初三年に倭国を訪れた正使ではない仮の魏使(郡使)は首都邪馬台国に詣で、卑弥呼に謁見するわけには

いかなかったのです、この文は伊都国に到着した郡使がそのまま伊都国に駐留し、伊都国内外を散策しつつ倭国を調査し、倭国報告書を書く意思を表明したものだと思われま

す。つまり倭国報告書とは、郡使が倭国を訪問した際の伊都国に到る迄の旅行記、伊都国駐留中に役人から伝聞した情報、伊都国内外を散策した時の見聞録などを集めて、伊都国滞在中に作ったものなのです。すると倭国報告書をもとに書かれた『魏志倭人伝』の道程記事は、伊都国迄は郡使の実際の体験談であり、伊都国以降は倭人からの伝聞となります。だから伊都国迄の国の記事と伊都国以降の国の記事とは、情景描写の有無など、記述様式がガラリと変わってくるのです。

このことから邪馬台国への道程記事は伊都国迄が連続的に記され、伊都国以降は放射的に記されるとする放射説が成り立つこととなります。又、連続する二十一国を最初は郡使の駐

在する伊都国の北に隣接する斯馬国から始め、最後は伊都国の東に隣接する奴国で終えたとする『反時計回り連続説』にも十分に辻褄が合うこととなります。

「魏志倭人伝」の解説について思うこと

市民サークル「鎌倉雅友会」代表 神奈川県会員 田中 眞生雄

最近、本居宣長に共感を覚えている。その一つに地理観がある。小生、古代史の謎の解明には、ほとんど地理観が関わっているが、宣長も同じ地理観ではなかったかと思慮させられるのだ。

過って、中国からの留学生の指導をしたときのこと、その留学生の言うには、日本の山は、中国ではほとんどが日本で言う丘に当たるといふ。中国では、人の住めないような険しいのが山であると。中国の荊州出身であり、諸葛亮孔明が自慢であったのを思い出す。今、魏志倭人伝の解説に取り組み、稿にした。或知人の感想には、「山島」という表現は、正得的を得ているとあった。知人も過って、世界中を渡り歩いた経験者である。

留学生と魏志倭人伝の「山」とは違いがあるのだろうか。本居宣長は、「山島」をどのように解釈したのだろうか。若くして、日本地図を作成し、各地を巡り、旅日記を残している。吉野の山が気に入っていたと言ふ。やはり、同じ山島を感じていたのではないだろうか。この、山についての印象の違いは、魏志倭人伝の解釈においては、決定的な解釈の違いとなる。となれば、「山」に限らず、それ以外のものごとについても、中国人の考え方に對する理解が必要であり、更に、陳寿という人の考え方についても留意しなければならぬということになる。未だ、解釈がままならないのは、魏志倭人伝のせいではなく、解釈する人の側に原因があるのではないだろうか。

この夏には、少人数ではあるが、宣長にならない、新趣向の

体験講座を開催予定であり、古代史の謎の解明について、私論の解説と議論により、理解を深めたいと思っている。

邪馬台国候補地が満たすべき条件

千葉県委員 福島 巖

現在各地に邪馬台国が存在している。地名が似ているからという理由だけで邪馬台国と決めつけるのは問題があり少なくとも次の八項目の説明ができないと不資格と考える。

(一) 倭国大乱はどのような原因で発生したか、他国との戦乱ではなく、自国の内乱になぜこのように四、五〇年もの長期間乱れたか

(二) 卑弥呼はそれをどのようにして解決できたか

(三) 南にある狗奴国はどこで、なぜ卑弥呼と敵対したのか

(四) 邪馬台国はどのような目的で魏に朝貢したのか

(五) 魏王からの贈り物をもった使者がやってきて伊都国までは見聞録を載せているがそれ以降はどうやらそこで聞いた邪馬台国への日程を書いているだけである。実際は土産物をもって宮殿に行っているはずなのになぜ中途半端な伊都国までの話で終わらせているのか。

(六) 帯方郡から一万二千里に邪馬台国があると書かれていて伊都国までに九千里を過ぎていのに更に水行三日、陸行一ヶ月もかかる矛盾(一里は八〇メートルの設定)。

また伊都国が邪馬台国の玄関口であるような取扱いになっている矛盾

(七) 卑弥呼の墳墓の説明 彼女が亡くなって一〇〇人も殉葬墓であること、数十年も乱れた国の王墓は小規模な円墳であった。これをどの墳墓に想定するか。(混乱した国が著墓のような巨大古墳を作る能力は無かったはず)

(八) 卑弥呼の国がどのような形で大和朝廷につながっていたか。

国名の邪馬台国でも耶馬耆国(亀の意であるとの韓)の学

者の説もあるが)でもこの国を特定するのに重要なファクターでは無いと考える。海外から豪族が移住してきて各地に国を作っていた場合日本のどこにも古墳や似たような地名があるので日本国中が邪馬台国になってしまっている現状がある。振り出しに戻って考えるべきである。

第二回會員研究発表大会概要報告

「邪馬壹国(やまとこく)は阿波・徳島」の意義

歴史でまちづくり推進協議会 梨目 正

我々は「魏志倭人伝」に書かれている内容を、新技術である「グーグルアース」を用い原文のままに正確に読み解くと記載されている「邪馬壹国」の位置が「徳島県名西郡神山町神領(かみやまちょうじんりょう)」となる事を証明しました。「書かれている距離は全て正確な直線距離」、「単位は魏の時代の短里(一里≒七十六・七十七巴)」であると仮定し、二〇〇六年に特定された項羽の住んでいた「会稽東冶の真東」と言う情報と組み合わせるとその交点は「神山町神領」となります。

他の「魏志倭人伝」に書かれている距離や方角、地名も全て矛盾無く説明出来ます。また当時の徳島県で「辰砂が採掘されていた事実」や、「記載されている地名と現存する地名の一致」など、全ての情報に関して整合が取れます。

記載されている内容は極めて正確であり、古代の人々がこれだけの科学的な知識や技術を使いこなし日本と大陸間を行き来していた事実と接し、純粹に尊敬の念を抱かれます。

新しい技術が新しいサービスやライクスタイルを提供するのと同じ様に、インターネットと言う新しい技術が歴史研究にも応用され、今回の歴史地理学的アプローチなどが従来の文献・考古学的な研究と組み合わせられる事で、今後も新しい

発見がなされるものと期待しております。

邪馬台国九州説から解ける前方後円墳の起源

歴史推理作家・日本ペンクラブ会員 角田 彰男

鉄交易ルートを握った対馬・宍岐勢力が鉄で武装し宍岐の大率(軍隊)の武力で博多の奴国に上陸し伊都を王都に邪馬耆国を建てた。邪馬耆国は玄海の海人勢力の「天孫降臨」から生まれた島部を除く倭国の別名で、ほぼ北部九州(含倭国)。倭国は紀元前から七世紀末の滅亡まで約千年続いた。その間に邪馬台国東遷は無く、又、邪馬台国近畿説は誤りである。詳細は拙著「邪馬台国五文字の謎(三版)」をどうぞ。

前方後円墳の起源を探るには江戸の改修前の古地図が手掛かりで、それから島姿古墳と仮定した。倭王は対馬人であるから博多沿岸の王墓の甕棺墓の役割は、倭王を洗骨して広形銅銚を立てた葬送船で対馬に送る為と考えた。そこで調べる対馬の古墳は弥生初からリアス式海岸の岬や無人島に全て造られたという。王を初め対馬海人は九州で活躍したが死後は甕棺墓で洗骨され、対馬へ帰葬されたと解ける。それが基になり、故郷対馬の島&岬の墳墓をイメージした人工の島姿古墳として九州側で築造されたのが前方後円墳である。

この古墳築造は豪族にとって鉄器保有のステータスであり、服属すると鉄器を貸与されると多くの民が集まって来た。これにより狩猟・採集生活から鉄器を使った農耕社会へと社会が進歩し、多くの民は、生産が計画的になり生活が豊かになったとして対馬人の倭王の治世を大歓迎した。こうして更により多くの民が築造に参加し、次第に列島各地に大型前方後円墳が造られる様になった。よって前方後円墳は奈良天皇家の創始ではなく、国内の五千基以上の同古墳は、各地に進出した対馬人や対馬系の倭人、あるいは倭王に忠誠を尽くし鉄器を供給された豪族に流行した対馬系の古墳と言える。

邪馬台国と女王卑弥呼を尋ねて

大下 盛敏

- 一、 带方郡を出発
- 二、 末盧国へ
- 三、 目前に邪馬台国
- 四、 先遣別動隊は投馬国へ
- 五、 本隊が邪馬台国へ
- 六、 周辺に小国あり
- 七、 女王卑弥呼の死
- 八、 倭国の風習
- 九、 狗奴国との争乱原因は
- 一〇、 余里についての考察
- 十一、 邪馬台国はやはり北部九州
- 十二、 倭人伝を紐解いて

*目次だけを紹介させていただきました。(事務局)

その昔、倭国と大倭国が戦いを……

尾関 郁

隋書・唐書・新唐書と日本書紀との外交的記述の突き合わせに文化伝播論・辺地革命論・民族移動論で補強し、倭国と大倭国の成り立ち及び両国の戦いを解明した。要旨は ①倭国と大倭国(唐書・新唐書の日本、後に大和朝廷と呼称)は五〇〇年以上、並存した ②倭国は大倭国との戦いに負けた ③後に倭王は官位を受けて細々と継承した、などである。

さらに三国志・水経注・契丹古伝等により揚子江南に居た倭人は越・齊・秦・燕・漢に追い払われ、朝鮮半島南部で倭国を形成し、考壺帝末期には北方勢力の圧力を受けて渡来する、その過程で阿每家と卑弥家が覇権争いを続け、他方、海東諸国記による黒龍江北の狭野(後の神武天皇、姓は不明)は高句麗のカシユハラ經由で渡来し、倭国内の覇権争いで逃げ、奈良で大倭国を建て、カシハラ宮で統治したと加える。

その根拠は a 唐書と唐会要は倭国と日本を、またダイ旧事本紀は倭国と大倭国を別の国として記述 b 隋書・唐書・新唐書と日本書紀との外交的記述が不整合、特に日本が初めて中国と通ずるのは新唐書では用明天皇・目多利思比孤による六〇〇年とするが、本当は七〇三年 c 日本書紀に岡縣主の子孫が塩の生産区域を仲哀天皇に、また日向の髪長媛を大鶴鷄皇子に差し出したことは倭国の負けの意味 d 続日本紀は文武天皇が倭王に従四位下を授くとする、ことである。

これらのことから付随的に左記のことが帰結し得る。
 ○七〇〇年以前の日本書紀は内外の情報を取り込んで作られ狭野は新唐書では阿每家として偽るなどかなりデタラメ
 ○九州倭国からの遷都はなく、狭野の奈良行きは侵略移動
 ○卑弥呼は奈良には居らず、邪馬台国近畿説は不成立
 ○遣隋使・小野妹子の派遣は虚偽
 ○日本書紀内で卑弥呼と倭の五王を捜すのは徒勞

騎馬民族説の復活「扶余族に征服された邪馬臺国」

槌田 鉄男

嚮向は三世紀の遺跡である事を前提に魏志倭人伝等の文献と考古学的事象を照合する六つの論理的検証から、三つの結論を得た。この事で大和朝廷誕生の謎は概ね解けたと考える。
 一、 邪馬臺国を含む女王国は熊本中部以北の北部九州に存在し、一方で狗奴国は熊本中部以南に存在した。
 二、 嚮向遺跡は邪馬臺国が東征した結果ではなく、騎馬民族である扶余族と彼らに担がれた公孫氏によって造られた。
 三、 倭人伝は邪馬臺国への扶余族の来襲を一旦は撃退するが、終には制圧されてしまうまでを記載したものである。

【検証一】嚮向遺跡は三世紀に突然出来たものであり、二世紀初頭から存在したはずの邪馬臺国とは時代が一致しない。また鉄や絹が出ない等から近畿説は成立せず、北部九州の方が倭人伝との一致点が多い。

【検証二】女王国の国々は弥生渡来人の国であり、狗奴国は縄文人の国であった事を倭人伝から読み取る事が出来る。

【検証三】検証二から両国の国境は熊本中部に置く事が出来る。邪馬臺国を筑紫平野、詳らかに出来ない二一国は熊本北部、狗奴国は熊本中部以南が一番合理的な設定である。

【検証四】嚮向から始まる初期型前方後円墳の急速な拡大は馬の利用なしではあり得ない。また嚮向遺跡に影響した吉備の桶築遺跡の特殊器台は殉葬時の生贄の代わりとすれば、これらの遺跡は扶余族が造ったとできる。また嚮向遺跡には公孫氏の影響が見られる等から結論二が得られた。

【検証五】卑弥呼の死が弥生時代の日本の風習にない殉葬であったこと等から倭人伝は邪馬臺国が扶余族に制圧された事を示唆していると考ええる。

【検証六】今回の説によって呉鏡の存在や三角縁神獣鏡の発生など東征説では説明できない事が説明出来る。

邪馬台国(原ヤマト)は東三河

駿河以東は狗奴国

先古代史の会会長

前田 豊

不思議なことに、邪馬台国比定地は、日本列島全体に広がって一四六以上ある。本論者は、畿内説の拡張版である参遠地域・東三河・邪馬台国仮説を、一九九六年に著書『古代神都・東三河』において提唱している。魏志倭人伝で、日本列島は九州を北に、本州が南に延びる形で理解されていたようである。魏の使者が九州北部に到着するまでの地理はほぼ判明しているが、九州以外の地は不詳として、傍国名だけしか書かれていない。しかし伊勢湾周辺の地名が多いようだ。带方郡の使者は邪馬台国まで行っていない可能性があり、位置情報が不足している。古代日本の理解を進める上で鍵となる要素情報は、次の通りで、いずれも東三河説を裏付けるデータが存在する(詳細省略)。(一) 日本各地の弥生時代遺跡の分布、

(二) 邪馬台国時代以前の日本固有の銅鐸の出土地分布、(三) 古墳(前方後古墳)の分布、(四) アズミ族の居留伝承地、(五) 高天原伝承地、(六) 神社伝承、(七) 記紀・古史古伝と地域史の関係、(八) 中国の三国志時代の政治的背景と各種金印の出土地、(九) 徐福伝承地の分布(日本列島で主となった徐福は邪馬台国と関係がある。東三河の牛窪記に徐福の子孫が東三河に住み栄えたと記載している。)(一〇) 沼津に存在するこの地最古の前方後古墳/高尾山古墳(三三〇年頃の被葬者は物部氏のイカガシコ命と考えられており、狗奴国の王であった可能性がある。富士山南麓に存在した久野、久努国は狗奴国の残影を反映している。)(十一) 海人(あま)族の東遷(渥美半島はアズミ族の拠点) 東三河の豊川沿いに羽衣の松と徐福上陸伝承をもつ。結論として、倭国大乱は列島全体で起きており、東海勢力の原倭国(邪馬台国) が列島西部の国々と共立し、奈良に大和政権を確立した可能性が大きい、と考える。

洛陽出土とされる三角縁神獸鏡

……中国訪問実見報告

驚崎 弘朋

中国河南省の古鏡研究家で鏡コレクターの王趁意氏(一九四九年生まれ)が、洛陽発見とされる三角縁神獸鏡を、二〇一四年十二月に『中原文物』(河南博物院主編)に論文発表した。これは、二〇一五年三月二日の朝日新聞で紹介された。ただ、現物を見た日本人はいない。そこで二〇一五年十一月下旬、大阪府教育委員会の西川寿勝先生と一緒に河南省鄭州へ赴き、日本人として初めてこの鏡を実見した。

十一月二十三日(月) 関西空港から上海経由で河南省鄭州へ。鄭州は古代殷(商)の王都があり、今でも当時の城壁(土を固めた四km四方)が残る。鄭州が吹雪のため着陸できず、四〇〇km離れた斉南市(山東省)へ。一晚、斉南市のホテルに泊まる。

十一月二十四日(火) 悪天候のため、飛行機がなかなか飛ばない。夕方ようやく斉南空港離陸。鄭州着後タクシーで四〇kmの雪道を約二時間かけて夜九時頃にホテル着。丸一日のロスと積雪のため、洛陽市漢魏洛陽城付近の白馬寺付近(鄭州の西)および曹操墓(鄭州の北)の見学を断念。

十一月二十五日(水) 午前、王趁意氏の自宅(公務員宿舍)を通訳同伴で訪問。奥様と友人(鏡研究の仲間) 合計三人が出迎え。王氏自宅で終日を三角縁神獸鏡とその他古鏡の撮影や意見交換などで費やす。洛陽出土とされる三角縁神獸鏡を実見し写真撮る。西川先生が実測、直径約十八・三cm。重量を測る(約六八〇g)。また、形状も調べた。間違いなく三角縁神獸鏡である(「吾作」で始まる三角縁四神四獣鏡)。この鏡は王趁意氏の個人所有で現在も自宅に保管している。以下、意見交換など。

○出土地点

出土地点・出土状況を突っ込んで聞いたが、結局はつきりせず。王趁意氏は漢魏洛陽城付近の一〇km四方(白馬寺あたり)のどこから出土したとするのみで、明確な答は無く口を濁した。出土状況や共伴物の情報も無い。

○入手時期

二〇一五年三月の朝日新聞報道では、二〇〇九年ごろ、当時、洛陽最大の骨董(こつとう)市で、市郊外の白馬寺付近の農民から譲り受けた」とのことであったが、今回の面談では「二〇〇七年ごろ」との説明があった。

○鉛同位体比分析

訪中に先立ち、鏡の鉛同位体比分析が可能か王趁意に打診しており、可能性がありそうだったので、西川先生がサンプル採取のキットを持参した。ただ、実際には王趁意氏から「河南省の上層部に事前に相談したが、【もつと上のレベルでの日中合同プロジェクトといったような

プラットフォームをまず作り、それから鉛同位体比分析をすべき」との回答があったとのことである。従って、今回は分析用のサンプル採取は断念した。

○三角縁神獸鏡を実見して(写真参照)
ここでは、鏡を実見しての驚崎の感想を記す。なお、西川レポート『洛陽発見の三角縁神獸鏡実見報告』(二〇一五年十二月二十四日、日本書紀研究会で発表)も参照の事。



① 日本で約五六〇面発見された三角縁神獸鏡と共通点が多く間違いなく「三角縁神獸鏡」である。直径二〇〜二十二cmが多いのに対し、今回の鏡は十八・三cmとやや小ぶりだが許容範囲。

② 銘文帯の幅は広く三十一文字は大きい。また極めて鮮明で欠字や読めない字は無い。

銘帯は「吾作明竟(鏡) 真大好 上有聖人東王父西王母 師(獅) 辟邪口(巨) 位至公卿子孫壽」の長文を刻む(●字は「街」の真ん中「圭」が「金」)。



驚崎が今まで見た古鏡はそう多くはないが、その銘文が最も鮮明。十一月二十七日(金)に鏡四〇〇〇枚を個人所有するコレクターの鏡七〇〇枚を鄭州の自社ビル展示場『未来銅鏡芸術館』で実見した。その中で漢・魏晋朝時代の銘文入り鏡の約一〇枚も実見したが、これらと比較してもこの三角縁神獸鏡の銘文は格段に鮮明。

③鏡の地下から銘文の立ち上がり幅は狭い(文字の肉厚は薄い)。だが、立ち上がりの錆崩れは無く、また銘文の文字の高さはほぼそろっている。更に、文字の表面は凸凹が無く人工的にカンナで削ったような平滑感があるのも多い(光るべし)。



表(鏡面)：赤サビが非常に多い



背面(文様面)：サビが少なく銘文が鮮明

④この鏡は中原の出土鏡特有の硬くて厚い赤サビが随分見受けられる(特に表の鏡面)。日本出土の鏡のサビは土壌水分と塩分の影響から製作時の光沢は失われ緑青による錆化

⑤今回の訪中は大きな意義があり。これを第一回として交流を続けたい(皆さん一致)。

十一月二十六日(木)

午前中は、王趁意氏の自宅を再度訪問。西川先生が前夜二五日にまとめたレポートを王趁意氏へ報告し意見交換。午後は王趁意氏の案内で河南博物館を訪問し、郝本性氏(河南省文物考古研究院原院長)、湯氏(同、評価委員会(長老)の二人の長老、および張鎰生氏(河南博物院研究館員、『中原文物』副主编)とお会いした。西川先生が前述レポートを説明し、意見交換を行い、

がはなはだしいものが多い。西川先生はこの「赤サビ」から考えると、この鏡は中国「中原」産で、日本から持ち込まれたものではないと説明され、これはかなり説得力がある。ただ、銘帯および付近にはサビ特に「赤サビ」が少なく、そのおかげで銘文が非常に鮮明で、文字を読みにくくするサビは無い。このように、銘帯にサビが非常に少ないのは不思議である。これは、表「鏡面」と背面「文様面」の写真を比較すると明らか。

西川先生、王先生、驚崎



西川先生が郝先生・湯先生に説明：11月26日、河南博物館にて



高良大社所蔵の三角縁神三獣鏡（鷺崎撮影）
 中世以来、高良大社の神鏡として伝えられてきた
 直径約20cm。銘文6文字は読みづらい

二人の長老はうなずいていた。印象的なのは最後のコメントで、

（湯氏）科学的測定は重要である。昔はなかったが、一九八〇年代から鉛同位体比分析などが出てきた。今後、こういうものを利用すると良い。

（郝氏）研究を行い、結論を出し、発表するのは良い事だ。
 十二月二十七日（金）

午前中は前述の鏡コレクター所有四〇〇枚の中の七〇〇枚の古鏡を『未来銅鏡芸術館』で実見した。なお王趁意によれば、河南省には鏡コレクターが多く、この他にも三〇〇枚を所有する人が三人もいるとのことである。昼頃の便で鄭州から上海・関西空港経由で羽田空港へ。なお、二十九日（日）は羽田から福岡へ飛んで久留米市での全国邪馬台国連絡協議会「第二回全国大会」に出席した。翌三〇日（月）には高良大社を訪問し、竹間宗麿宮司の案内で宝物殿に入り、大社所有の神鏡「三角縁神獣鏡」（祇園山古墳出土と言われる）を実見した。銘文は六文字（日、月、天、王、田、目）が認められるが、

今回中国で実見した鏡とは鮮明度に大きな差がある。
 （最後に）

今回訪中での西川先生「三角縁神獣鏡の実見」については、十二月十六日の読売新聞に始まり、かなりの新聞・テレビが報道している。ただ、この三角縁神獣鏡の出土地点・出土状況が依然として不明という事が影響し、慎重な意見を述べる専門家が多い。

●「写真では文様や銘文にやや違和感があり、自分の目で確かめるまで価値判断ができない」（菅谷文則・榎原考古学研究所所長）

●「出土状況が分からず、日本から後世に渡った可能性もある」（福永伸哉・大阪大教授）

●「本当に洛陽からの出土品か分からず、確かな出土地の議論が今後必要」（岡村秀典・京都大教授）

●なお、安本美典・元産業能率大学教授は、二〇一五年三月の朝日新聞記事を受けて、季刊『邪馬台国』百二十五号（二〇一五年四月）で「これは現代の捏造鏡だ」と論評した。二〇一六年一月「邪馬台国の会」の討論でも、本物説を主張する西川先生と激論となった。

ただし、その後、以下の中立的なマスコミ報道がある。

●「出土状況が不明なため資料価値を全否定する見解もある。私も最初はそう思ったが、興味深い論争を一步前に進める機会になるかもしれないと考えを変えた」「厳密な発掘による資料だけが考古学の材料ではない」「中国側は問題の鏡の分析で、日本の国家機関の参加を望んでいるという」（三月二日毎日新聞伊藤和史記者）

このように、王趁意氏が「洛陽出土鏡」とする今回の三角縁神獣鏡は、出土地点・出土状況が不明のため、「一七〇〇〜一八〇〇年前に洛陽で製作された出土鏡」とする決定材料が乏しい。一方では、「後世に日本から渡った鏡」「現代の捏造鏡」と断ずる証拠も無い。旧石器捏造事件の時のように捏

造現場を写真撮影したわけではない。

従って、現段階では結論を出すのはまだ早く、更なる調査と検証が必要と考えられる。特に、鉛同位体比分析とか三次元計測など、客観的説得力のある科学的分析が重要であろう。
 ＊鷺崎会長の中国訪問の報告は、会員発表大会の時に発表された内容を合わせて掲載しました。（事務局）

特別企画 1

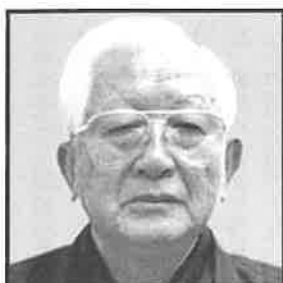
上田正昭特別顧問を偲ぶ

全国邪馬台国連絡協議会特別顧問の上田正昭先生が逝去されました。上田顧問はご病体ながらも当会のためにご指導をしてくださりました。昨年末に発行した会報には投稿文をいただきました。もしかしたらご遺稿だったかもしれませんが、ご冥福をお祈りいたします。

あらためて上田正昭特別顧問の経歴をご紹介します。（ウィキペディアより）

上田 正昭（うへだ まさあき、一九二七年四月二十九日〜二〇一六年三月十三日）は日本の歴史学者、小幡神社宮司、歌人。兵庫県城崎郡城崎町（現・豊岡市）出身。京都大学名誉教授、大阪女子大学名誉教授、西北大学名誉教授。勲二等瑞宝章。修交勲章崇徳章（韓国から）中学生時に、小幡神社（京都府亀岡市）の社家・上田家の養子となり、長じて大学時代から同神社宮司を務める。

國學院大學専門部で折口信夫らに師事したあと、一九四七年に京都大学文学部史学科に入学し、卒業後高等学校教員を経て京都大学助教授・教授となった「二」。日本古代史の第一人者であり、古代日本



に渡って来た「渡来人」がこの名称で教科書に記載さ
うになったのは上田の影響である。

上田正昭教授を悼む

特別顧問 いき 一郎

さる三月、上田さんが八十八歳で亡くなった。

上田さんの著書に接したのは半世紀前、「渡来人」の問題提起だった。以来、かなりの本を読ませて頂き、一九八一年テレビの仕事で『日本歴史展望』（卑弥呼く福澤諭吉二十六回・テレビ朝系）のプロデューサーを務めてから各地でお会いした。

テレビの通史はかなり冒険的で、旺文社の出版に合わせて企画され、古代から現代までを奈良本辰也監修で、第一回は上田さんの起用でヒットさせようということだった。

当初、制作会社が上田さんと出演交渉した時に「老岐君は九州説だからテレビに出たくない」と言われたらしい。

ぼくらは上田さんを福岡に招き、有名な筑後・女山(神籠石山城)にご足労願うことを考えていた。京都の上田教授宅に伺い、ぜひ、とお願ひし、番組は近畿説か九州説を問うものではないと説明したのだ。

まだ寒い三月、無事に女山のロケは終わった。九州朝日放送の局内喫茶で歓談している時に、歌手さだ・まさしさんがやってきた。ぼくは国学院から京大に入った上田さんに「さださんは国学院の出身ですよ」というと、上田さんは「家の娘がファンなんだ」と満悦で握手された。戦後、京大はいゆる傍系の学校出身者にも門戸を開いた。福永光司さんや作家・金石範さんらだ。

上田さんは以後、九州へ来られて何回かお会いした。ふぐ料理でスタッフのMディレクターともども舌鼓を打ったこともある。M君は後に邪馬台国シンポなどを主宰するほどの古代史通、『季刊邪馬台国』の発行者とは子どもの頃からの付

き合いだったという。

上田さんとは「福岡アジア文化賞」(九十八年受賞)の会でもお会いした。その前、九十四年の天津での「日本人の国際化」シンポでは一週間近くご一緒した。古代史部門では上田さんや鈴木靖民さんら二〇名以上の参加だった。シンポは『走向国際化的日本』として出版され、ぼくは「大」について「短い論文を寄稿している(九十五年刊)。

古代朝鮮問題について、福岡では七〇年代から泊勝美記者が翻訳の腕を振るっていたが、泊氏は上田さんが非アカデミーの自分を親しく指導・応対してくださったと感謝していた。この上田さんのやさしさは本紙二号への寄稿でも分かる。卑弥呼と鬼道についての追究を米寿でなお市民研究者にも分け隔てなく公開されていた明確な印なのだ。

ここに改めて記すまでもなく、上田さんの研究分野は民俗学と神話学の視点にくわえ、東アジアの広い視野を見せていた。アジア史学会長にふさわしい人はほかにいなかった。ぼくは沖縄で開かれたこの会に出席した。中国や韓国の研究者も上田「老師」の熱烈な崇拜者だった。

やはり、上田正昭著の柱を紹介しておこう。

① 多くの分野の人と付き合った方は異色の対談を遺した。

共著『日本文化の創造 日本人とは何か』雄渾社六十八年初のノーベル賞受賞者・湯川秀樹さんと

② 朝鮮文化へのアクセス 座談会

『日本の朝鮮文化・座談会』司馬遼太郎・金達寿さん

中央公論社 七十二年

『古代日本と朝鮮 座談会』

『上田正昭著作集』全八巻 角川書店 七十四年

② 『私の日本古代史』(上下) 新潮選書 九十九年

遺作『古代日本と東アジアの新研究』 一五年秋

著作のほか、社会的・国際的貢献はこうだ。

前記 アジア学会 会長

中国社会科学院名誉顧問

韓国西北大学名誉教授

ほか、大阪日韓の祭り・人権教育・朝鮮学校差別反対
なお、作家松本清張との対談、哲学者梅原猛さんとの共
著(近年は出雲)など枚挙に暇なしだ。

いま、ここに四〇年を超えるご交誼を思い出すと、故上田正昭さんは国学院で折口信夫らに鍛えられて文章の達人で、かつ獨創性に優れていたといえる。京大本流でなかった福永光司さんと同じく、「努力の天才」だということだ。ぼくは福永さんが母堂の介護で中津に帰られた九〇年代に私語を交わす幸運に恵まれた。福永さんも学界では傍流、ブセン川武道専門学校の出だったのだ。氏も、普通の研究者がやらない道教という未開拓の分野に取り組んだ。柔道家の体力と気魄が支えたといえる。

わが上田正昭さんは、人の見向きもなかった闇の分野に光を当てた。日本人は大敗戦後も自己陶醉の単一民族・優越民族意識で固まっていた。京都に住んで、神主を務めながら、見るべきものをしかと見通し、部落差別の愚を知り尽くした人だ。

百歳まで、ゆっくり生きてほしかった上田さん、残念です。中国史料をもっと話したかったです！ 覚えていきますよ、天津シンポでぼくが「大」について発表して、意味が「大きい」だけでなく、「離れた」という意味にも使われ、「大秦国」や「大夏国」の例もあると話しましたね。「初めて聞いた、知ったよ」と言ってくれました。その度量の大きさに今なお感銘を受けています。

上田先生、忙しすぎ、研究しすぎましたね。

合掌

上田正昭先生と全国邪馬台国連絡協議会

事務局長 菊池 秀夫

上田正昭先生と初めてお会いしたのは、今から七年前の平

成二十一年六月に大東文化大学で開催されたアジア史学会のシンポジウムの時だった。シンポジウムが終了して懇親会が催され、その時に偶然隣にいたのが上田先生だった。体格のよい堅物そうなオヤジというのが印象だった。開宴まで二人とも時間を持て余したので仕方なく雑談を始めた。

考古学の事しか関心がなかった当時の私は上田先生の事を知らなかった。「私は隼人の事を研究している。隼人の事をご存知ですか。中村明蔵氏や永山修一氏を」存知ですか。」と上田先生に質問すると、「中村君は自分の教え子だよ」という回答が返ってきた。今から思うと、隼人の研究の第一人者である上田先生に対して大それた話しをしてしまった。上田先生は、変な若造がよくこの会場に参加したものだと思われたかもしれない。上田先生は、日本のみならずアジア全体の歴史学の権威者でもある。



筆者と王仲殊先生

私がアジア史学会のシンポジウムに参加したのは、中国から参加した王仲殊先生に会うためだった。王先生は三角縁神獣鏡は渡来した中国人が日本で製造したという説を発表された方で、自著『隼人族呉人説』（新風舎）を王先生に読んでいただきました。シンポジウムが終了後、帰路につき王先生と話をすることができました。王先生は流暢な日本語で笑顔で話をしてくださった。王先生は、残念ながら昨年死去された。アジア史学会のシンポジウムには、当会名誉顧問の西谷正先生や小林敏男先生も参加されている。

その後、考古学から古代史全般に目を向けると、上田先生は偉大な先生であることに気がついていった。平成二十四年に自著『古事記伝説』（兼六館出版）を出版し、多くの方々に自著を贈呈した。その結果はほとんどは反応がなかったのだが、上田先生からは数日後に手紙が届いた。「興味深い視点での論究で、ますますの研鑽を念じます」と書かれていた。平成二十五年の夏頃になると、全国邪馬台国連絡協議会設立に向けての準備活動が活発になってきた。重要なテーマとして顧問の選出があった。邪馬台国という点、どうしても考古学の先生が対象となってしまうのだが、それでは従来の歴史研究団体と変らない。当会の目的は全国的に幅広い分野の方々の結集を目的としていた。特に、文献史学との連携は重要と考えた。上田正昭先生には是非参加していただきたいと願っていた。

全国邪馬台国連絡協議会の設立当初のメンバーは、考古学の先生方とは面識があるが、上田先生とは縁がある人はいなかった。私は四年前にアジア史学会の懇親会でお会いし、その後、自著を寄贈したりはしているが、上田先生の記憶に残っているのか疑問だった。突然、まだ発足もしていない団体の顧問就任のお願いをしても、手紙を送ったただ引き受けていただけとは思えなかった。なんと、直接お会いしてお願いをしたかった。

八月に森浩一先生が逝去され、九月に京都で「森浩一先生のお別れ会」が企画された。私は森浩一先生に大変お世話になったので、巨大な台風が京都を直撃する中、京都へと向かった。私の少し後に新幹線に乗った大塚初重先生は、台風の影響で列車が運行できなくなり、断念して引き返された。

「森浩一先生のお別れの会」に上田正昭先生は必ずご参加されると思った私は、全国邪馬台国連絡協議会顧問就任のご依頼の手紙を持ち、お願いするつもりでいた。

式典が終了すると、多くの人が上田正昭先生に殺到した。

特にマスコミ各社が上田正昭先生のコメントをいただくようにして必死になっていった。そんな中、上田正昭先生に「このような場所で失礼ですが、お願いがあります。この手紙を後でお読み下さい」と言って手紙を手渡した。非常識な者と判断されるか、熱心な者と判断されるか、それとも意識に残らずに終わってしまうのか分からなかった。

すると、驚いたことに翌日にはもう返事をいただいた。手紙の全文を掲載する。「拝復 森君とお別れ会、その逝去は痛恨のきわみです。全国邪馬台国連絡協議会、市民運動として有意義と存じます。去る八月十三日第三回目の膀胱癌の手術をし、来年米寿を迎えます。体力が衰え、特別顧問としてどこまでお役に立てるか、はなはだ心もたないのですが、その設立の趣旨に賛同して特別顧問を引きうけます。実証的なネットワークの会になることを念じます。」

平成二十六年の春、全国邪馬台国連絡協議会は正式に発足するに至った。最初の大きなイベントとして企画したのが第一回全国大会で、基調講演のテーマは「考古学から見た邪馬台国と、文献史学から見た邪馬台国」だった。上田正昭先生に講演をお願いすると、「昨年の秋より体調不良で、この四月十四日より再入院。第四回目の膀胱癌の手術をします。講演などはすべて辞退しています。ますますのご活躍を念じます。」という手紙をいただいた。

七月に開催した第一回東京地区大会の資料を上田正昭先生に送ると、「第一回東京地区大会の報告書などをありがたうございました。米寿をすぎ体調不良です。協議会の発展を念じます。」という手紙をいただいた。

上田正昭先生は全国邪馬台国連絡協議会の特別顧問に就任していただく以前から大病を患われていた。それにもかかわらず、全国邪馬台国連絡協議会の活動に関心をもちたいことが、手紙の内容からうかがい知ることができる。上田正昭先生からはその後の連絡はなかった。

平成二十七年の秋、会報第二号を発行するにあたり、特別顧問の先生方に原稿依頼のお願いをした。すると、上田正昭先生他多くの特別顧問の先生方から原稿をいただいた。大変有り難く思った。会報第二号で掲載したが、再度掲載します。上田正昭先生、本当にありがとうございます。ご冥福をお祈り申しあげます。

魏志倭人伝の解釈について

上田 正昭

『魏志倭人伝』は多言するまでもなく、西晋の陳壽が太康年間(二八〇—二八九)に撰述した、中国の『三国志』六五巻のなかの『魏志』三〇巻の東夷伝の一部である。したがって、『魏志倭人伝』の用語の解釈は、『三国志』全体のなかで、陳壽がどのような理解のもとで使っているかをまず検討することが必要である。

たとえば、「其の国、本亦男子を以て王と為し」と書いているのは、卑彌呼の死後「更に男王を立てし」と記しているのと関連する。もともと亦男王であったが、「更に」男王を立てたけれどもの意味と解せられる。そして「住まること七・八十年、倭国乱る。相攻伐すること歴年、及ち一女子を共立して王と為す。名づけて卑彌呼と曰ふ、鬼道を事とし、能く衆を惑わす」と記載する。

『後漢書』はこの乱を「大乱」とし、その時期を「桓帝から(靈帝)の間(一四七—一八八)とし、『梁書』や『太平御覧』では、靈帝光和(年中、一七八—一八三)としぼっている。

ところでこの「共立」という用字を重視してこれを原始的民主制とか部族同盟の傍証とする説がある。はたして陳壽はそのような意味で「共立」と書いたのであろうか。『三国志』東夷伝の夫余の条では、簡位居という王に嫡子がなく、王が死んだので庶子の麻余を「共立」したと述べる。さらに高句

麗の条では、伯固という王が死んだが、長子の抜奇が「不肖」であったから小子の伊夷摸を「共立」したと記述する。これらの「共立」は嫡子でない者が王となった場合に用いられていたことがわかる。

いままし原始的民主制や部族同盟のあかしとし重視するならば、卑彌呼の死後、一時男王が立つたとするさいに「男王を立てし」とあつて「共立」とは書かず、宗女壹与が女王となつたさいに「年十三なるを立てて王なし」とあつて、なぜ「共立」と書かれていないのかを改めて問わなければならない。

また卑彌呼について「鬼道を事とし、能く衆を惑わすの「鬼道」を『後漢書』は「鬼神の道」と記載しているの、それは「鬼神に事えて」の意味だとする説がある。この場合も陳壽がなにを指して「鬼道」と述べているかを『三国志』のなかで吟味しなければならない。『蜀志』劉焉伝には、張魯の母は「鬼道」をもって、常に益州牧の劉焉の家に出入したとする。この張魯は道教の教団(五斗米道)を創始した張陵の孫である。五斗米道の流れをつぐ張魯の母の「鬼道」は明らかに道教であった。陳壽は卑彌呼の宗教乃至信仰を道教に類するものとみなして「鬼道」と表現しているとみなすことができよう。

ただしだからというので卑彌呼のそれが、道教そのものであつたと断言するわけにはいかない。なぜなら日本古代史の史料に道教に関連する信仰や思想は明らかにみえているが、教団道教の受容を物語る史料はなく、道士の史料はあつても、道観(道教の寺院)は発掘調査でも今のところまだみられないからである。

『魏志倭人伝』の解釈は、『三国志』の用字にそくして考察する必要がある。いまはその若干を指摘したにすぎない。私に「鬼道に事へて」とよまずに、「鬼道を事とし」とよんできたのもそれなりの理由がある。

特別企画 2

― 応援しよう！ 熊本地震の被災地 ―

熊本市は今年四月十四日、十六日と二回にわたる震度七の激震と、その後の連続した余震によって甚大な被害をもたらしました。震災後には多くの被災者が避難生活を過ごしています。被災された方々にお見舞い申し上げます。

全国邪馬台国連絡協議会は、今年二月に沼津で第一回狗奴国サミットを開催し、第二回サミットを熊本市で予定して準備がすすめられていました。しかし今回の地震による影響が心配されます。実施については現地実行委員会の判断となります。今回は、宝賀寿男特別顧問から、熊本市に関する原稿を投稿いただきましたので、特別企画として掲載します。

阿蘇山と狗奴国地域圏

特別顧問 宝賀 寿男

一 上古日本の大噴火とその影響

九州の阿蘇山は、『後漢書』『新唐書』あたりまでの中国正史に出てくる唯一の日本の山である。『隋書』倭国伝及び『北史』倭伝には、「阿蘇山有り。その石、故無くして火起り天に接するもので、俗では以て異となし、因つて持祭を行ふ」と見える。中国本土や朝鮮半島には火山がないから、常時活発に火を噴く活動を続ける阿蘇山は、大陸からやって来た人々には驚異で、「山島に依つて国邑をつくる」という日本国土の特徴的なものとして受けとられたとみられる。

この阿蘇山は、外輪山と中央火口丘群たる中岳などの阿蘇五岳(最高峰は一五九二M)などから成り、外輪山は南北二二KM、東西一八KMに及び、世界最大級の面積三八〇平方キロの広大なカルデラ地形をなす。洪積世の中・後期、今から約二七万年前から九万年前に大規模な噴火が四回もあり、

そのなかで四回目の約九万年前の大噴火が著しい。そのときの火山灰は北海道や朝鮮半島まで達し、大量の火山灰や火山礫を噴出し、広範囲に火砕流を到達させて、それらが溶結凝灰岩などで残る。火口周辺には、火砕流台地と巨大な窪地(カルデラ)が形成された。その後も噴火を続け、西暦五五三年からの噴火記録が残る。

水がたまったカルデラ湖には巨大ナマズ(鯰)が主でいて湖水をせき止めていたのを、阿蘇氏の始祖神健甞命が、太刀で切り捨て、湖水は流れ去って大地となったといい、この鯰が流れ着いた地が現在の熊本県上益城郡嘉島町の鯰という地名になるといわれる。

次の九州での大きな噴火は鹿児島湾北部(湾奥)であつて、桜島を含む始良カルデラとされるが、これが三万年弱前(約二万九千年前から二万六千年前)と推定されている。直径約二十KMの大きな窪地を構成するカルデラである。現在の日本列島や日本海がいつ形成されたかの経過は不明な面もあるが、約一万二千年前には宗谷海峡ができて分離したとされるから、その頃から大陸と切り離されて現在の列島の形になったのかもしれない。

更に、約七三〇〇年前ないし約六三〇〇年前とされる鬼界カルデラの大噴火である。このときの位置は、大隅・薩摩両半島の南方の東シナ海の海中で、現在の硫黄島(鬼界ヶ島)・竹島(鹿児島県鹿児島郡三島村の村域)を含む海域一帯とされ、火山灰(アカホヤ)は遠くは東北地方南部まで到達した。主として、九州の中部・南部に広範に落ちており、火山灰が濃厚に降ったところ(火山灰の厚さ二〇センチ以上の地域)とそこまで行かないところの「境界線A」に着目する。

この線が、大分県北部の中津辺りから南西に延びて日田盆地から熊本市北西方、さらに島原半島東部をかすめて天草に及ぶ。ちなみに、アカホヤの厚さ三〇センチ以上の地域ということで、「境界線B」(九州中部と南部に分ける「白杵」代

構造線」とほぼ合致)を見るとしたら、大分県南部の佐伯辺りから南西に延びて熊本県の宇土半島南方の八代辺りに及ぶ線の南側となる(以上は、『新編 火山灰アトラス』二〇〇三)。これを、熊本県の熊本平野の主要河川も絡めて言うと、北から境界線A、阿蘇山から流れ出る白川及び支流の黒川、次に緑川、境界線Bという順になる。これだと、境界線二つで九州が三分割されることとなるが、別途、九州北部と九州中部とを分ける境界に「松山―伊万里構造線」を考える見方もある。

上記の両境界線A・Bの中間域が火山密集地帯で、阿蘇山が中心に位置する。西南日本内帯に続く九州北部の筑紫山系と、同外帯に続く九州の南部山系とが、中間部に噴出した阿蘇・九重等多くの火山の帯によって陸続きになった地帯といわれる。主な火山では、東から別府温泉に関係する鶴見岳、阿蘇山、更に島原半島の雲仙岳と東西に一連で続き、「別府―島原地溝帯」という呼び方もなされる。この地溝帯が、九州を北九州と中・南部九州とに大きく二分することにもなる。上古に現実起きた上記三つの大噴火や近畿地方以西での火山活動も考えると、様々な意味で、日本列島のなかでも九州はとくに火山王国といえよう。日本列島にいつからどのよう日本人の先祖が住みついたかは不明だが、犬の骨の貝塚からの出土例(神奈川県横須賀市の夏島貝塚や愛知県先の苧貝塚)などから見て、約九千年前には既に住民が居たとしたら、このときのいわゆる「縄文人」が鬼界カルデラの大噴火をなんらかの形で体験したのであろう。日本の歴史が大陸文化の入口として多くのことが北九州に始まるとしても、その始源期に大かれ少なかれ、列島原住の遠い先祖たちの生活が火山との関わりをもったことを十分に思わせる。

総じて言えば、アカホヤが濃厚に降って影響を与えた九州の南方地域では、山岳地形が多く、稲作にあまり適さず、主に畑作や狩猟が行われ、一方、影響の比較的少なかつた九州

の西北地方(福岡県・佐賀県)では、平野部に恵まれりアス式地形の沿岸部もあつて、大陸方面から到来の稲作農耕や漁撈が発達した。この両地域にそれぞれ在ったのが、弥生時代後期の女王国連合圏と狗奴国地域圏という二つの政治圏だとみることもつながる。弥生時代後期から古墳時代初め頃で邪馬台国と同時代の頃には、九州の中・南部地域では免田式土器(重弧紋長頸壺)が広く分布しており、それゆえ、森浩一氏などから、これがクマンのない隼人の土器ともいわれ、佐古和枝氏は狗奴国の象徴だともみる。『新熊本市史 通史 編第一巻』でも、「当時の政治勢力の違いを意味するもので、狗奴国の位置を考える手掛かりになるかもしれない」と記述する(佐藤伸二氏の執筆)。この辺は後述するが、ほぼ妥当な見方ではないかと言えよう。

ともあれ、往古から火山列島たる日本の地域形成に火山が大きな影響を与えてきたことが分かる。この辺に着目して、ロシアからの亡命貴族アレクサンドル・ワノフスキー(生没が一八七四―一九六七年、享年九三歳)の著書『火山と太陽』(一九四一年に初稿完成、戦後の一九五五年に出版)を読んでみることも必要かもしれない。彼は、ロシア革命の進行中に挫折を感じて日本に永住し、早稲田大学でロシア文学の講師として長く教鞭をとったが、そのなかで日本の火山を調査し精力的に尋ね歩き、併せて『古事記』研究をしたことで、その神話の新解釈が示される。火山の女神イザナミ、スサノオの火山的性格などわが国の創世神話・建國神話における火山にまつわる検討がなされている。

この紹介は、最近刊行の桃山堂編『火山と日本の神話―亡命ロシア人ワノフスキーの古事記論』でなされており、一読をお薦めする。同書は、ワノフスキー研究を含め、神話研究と地質学の二つのルートから火山列島から出てきた日本神話の謎を探っており、その源流が火山の王国・九州で生まれたと主張する本でもある。

ワノフスキーは、戦前の戸上駒之助教授の指摘を、「有史以前の日本のことを闡明するのには、古代アジアを研究することが必要である」「神代史は日本民族の歴史に外ならず」と言い、宣長以降の国学者はアジア大陸もアジア諸民族の言語・考古遺物も知らなかったから誤謬に陥ったことを指摘する(この辺は、戦後の津田史学の流れの研究者にもあてはまるのではなからうか)。そして、日本の最も精力的な火山たる阿蘇山に着眼し、「火山に対する印象―これが神話創造の発展に大きな役割を演じる要素となったのである。阿蘇火山は、日本の生んだ子供である、古事記神話の揺籃である。」と結んでいる。

ただ、日本の神話は世界の神話と比べ特異な点もあり、すべてが神話・虚構の世界かという問題があつて、そのなかに史実の原型ないしその片割れが残るとしたら、火山との関係だけで解決できる問題でもない。他の史書『日本書紀』などをどう取り扱うのかという問題もある。だから、日本神話の発生・組成の一つの手がかりを探るといふ意味で、火山という自然・地理的な要素も入れて、広くアジア史の視点で総合的に考えることが必要ではないかという警告だと思われる。

二 上古九州の主な地域区分

さて、九州ごと筑紫島は身一つにして、面が四つありて面ごとに名がつけられ、各々次のように言ふと『古事記』などの書に見える。これが、筑紫国の白日別、豊国の豊日別という名称は異説がないが、残り二つには『古事記』と『旧事本紀』陰陽本紀とで差異があり、結論では、肥国が建日別、日向国が豊久土比泥別とするのが呼称原型として妥当だとみられる。『古事記』は日向国(この場合、薩隅も含む)の替わりに熊曾国をあげて建日別とし、肥国を建日向豊久土比泥別というきわめて複雑な名前とするが、歴史的経緯や地理範囲などから見て、これが疑問だということでもある。

南九州の上古の住民が「隼人」と呼ばれたことは、異伝・異説を見ない。ところが、この隼人の原義と熊襲との関係については、諸論がある。現在でも、熊襲とは、肥後南部の球磨郡のクマと大隅国曾於郡のソオを併せた呼称「クマソ(熊襲)」とみる説が極めて多い。津田博士などの誤解とそれに基づくものが学究のなかにも多く残り、問題解決の大きな妨げとなっている。こんな現代用語の命名みたいなツギハギ略称が、古代に実際に行われたのだろうか(『筑前国風土記』などでは、「球磨嚼啗」と表記される例もあるが、後世の当て字であろう)。当該地域の習俗・墓制などを無視し、いい加減な語呂合わせで地理名称を比定することに疑問をもたない感覚が信じがたい。

しかも、この「隼人＝熊襲」というのが、『魏志倭人伝』に見える「狗奴国」とも同体だと言うに到っては、これが学究の頭脳、思考方法なのかと疑わせる。津田博士などの思考は戦前段階の狭い知識と歴史資料に基づくため、やむを得ない面もあるが、北東アジアの習俗・祭祀・伝承をまるで考慮せず、日本にあつても、古代の神祇・習俗、原始種族やそのトームを考慮していなかった。総じて、視野狭窄で杜撰なものであつた。だから、平気で鳥類の隼と獣の熊・狗(すなわち犬)とをゴツチャ煮でみることに、まるで疑問をもたなかった。原始種族の代表的なトームがこんな形で一緒になることなど、世界上古代どこにもありえないことだった。

長くなるから、ここでは簡単に結論だけをあげておくと、隼人とはこの種族がもつ犬の声で吠える風習に因る「吠人(はいと)」の転訛表記にすぎず、熊を祖系として祭祀対象とする種族(天孫族系統など)とは別種族であつた。要は、熊襲は隼人ではなかつたということである。これは、辻直樹氏(『上古の復元』)や古田武彦氏などが主張する卓見であり、他にもいくらか論者がいるが掲名しない。こうした見方は、記紀や風土記など関係文献を丁寧に検討し、上古代の習俗を

認識すれば導かれることである。

「狗奴国」とは、犬狼の祭祀・習俗をもつ住民(列島原住民)いわゆる「縄文人」たる山祇種族)の国だから、これは、犬吠えの習俗が史料に見える「吠人、すなわち隼人」の種族につながることは問題ない。その高官まで「狗古智卑狗」と「狗」の文字が入るが(一支国の官「卑狗」もなんらかの意味があるか)、一方、邪馬台国の高官の名に「伊支馬、弥馬升、弥馬獲支」、女王国に属する「投馬国、斯馬国、弥馬国」と「馬」が付くのが多いことと好対照である(『魏志倭人伝』には「その地に牛、馬なし」との記事があるが、少なくとも「馬」は疑問とみる。弥生時代くらいの遺跡から馬骨が出土したとされる)。『魏志倭人伝』には、もう一つ「狗」の文字が入る国があり、それは倭の北岸とされる韓地の狗邪韓国である。この地は、伽耶の金官伽耶国にあたりとされて異論はないが、この王家は新羅王家の金氏(慶州金氏)と同族で、後の金海金氏や日本に来て周防の大族大内氏につながる。新羅には月神祭祀があり、大内氏が永く妙見信仰を保持したことは名高い。

この辺は、言語感覚の問題であり、文字の遊びと解してはならない。縄文人の流れは、久米氏やモン・クメール種族にもつながるが、これら「クメ」は動物の「熊」とは異なる。「狗奴」が当時、どのように発音されたかは確認しがたいが、それが「クナ」と発音されたとしても、動物の熊にはつながらないということでもある。

隼人の墓制は、盛土の高塚式の墳丘墓という大和王権の墓制に対して逆であつて、地面に堅穴を掘って地下に埋葬施設を持つ特徴があつた。こうした墓制などから見て、隼人の主居住地域・勢力圏は、肥後南部の球磨川流域から日向中部の一ツ瀬川流域(概ね人吉から西都)と結んだ線から南側とみられている(上村俊雄氏「墓制からみた隼人世界」、『新版古代の日本第3巻 九州・沖縄』所収)。九州の先史・

原史時代の地域区分図でも、筑前・筑後及び肥前東部の「北部九州」、肥後の平野部の「中部九州」、薩隅及び日向南部の「南部九州」という形で、地域のまとまりをみる見方も示され、この「南部九州」とも隼人墓制は整合する(下條信行氏「九州古代史の特色」〔同じ上記書に所収〕で、ほかに東北部九州〔豊前〕・東部九州〔豊後〕・西北部九州〔肥前西部〕の地域区分もあげられる。上記三地域のほか、東部九州〔豊後・日向〕を加える四区分もある。

こうして見ていくと、九州はやはり主に三分割して地域圏を考え、「北部九州」、及び「中部九州」、南部九州」として、その上古社会をみるのが妥当である。そして、「北部九州」は邪馬台国連合圏、「南部九州」は隼人圏として、残る「中部九州」が狗奴国に關係する地域圏だとみられる。南部九州と中部九州とが列島原住たる縄文人の伝統・習俗をもつて近い關係にあったことは、太陰曆八月十五日の満月の夜に行われてきた「十五夜綱引き」が熊本以南で沖縄までの地域にあったことも示される。

そのうえで、考えられるのは、中部九州の地域は、隣接する西北部九州の弥生文化の影響も受けつつ、縄文人・山祇種族の伝統・習俗も保持したが故に、邪馬台国連合圏と争ったので、その王・卑弥呼は卑弥呼と素より和せずという状態になっていたのである(王の名は射弓に優れた山祇種族に出たことに由来したか)。両勢力がかなり拮抗していたのならば、かなりの文化・軍事技術も備えたとみられる。これが、どの程度の勢力圏をもったのかも、ここで問題となる。

三 考古遺物から見る中部九州の上古史

(一)で、上記の「中部九州」の主地域たる熊本県の上古史を考古遺物から見ていこう。

概略を記すと、弥生時代も後期後半から終末期にかけては、阿蘇北外輪山内側の黒川流域や熊本平野の白川流

び菊池川流域からも製鉄・鍛冶の遺構がいくつか発見され、鉄鏃や槍鉋、農具の鋤鉋先や鎌・鉄斧、棒状などの鉄片なども見つかった。なかでも、玉名郡和水町の諏訪原遺跡から鍛冶工房遺構が四基も出ており、上益城郡嘉島町の二子塚遺跡からも二基など、製鉄・鍛冶の顕著な痕跡が出土した。二〇〇二年段階では、弥生時代の鉄器の出土数は、熊本県(一八九〇)は福岡県(一七四〇)をむしろ凌いでおり、奈良県では十数点と少ないという統計があり、別の集計では福岡県が熊本県を若干上回る程度ともいう(川越哲志氏など)。これら諸事情から、鉄器の使用では熊本地方は北九州に遅れていない、と総括される(上記の『新熊本市史』)。

倭人伝にも見える「鉄鏃」の出土遺跡は、熊本県の玉名郡・菊池郡、山鹿市・阿蘇郡など、主に福岡・熊本県境の山間部に多い。代表的な遺跡として、山鹿市の方保田東原遺跡、菊池郡大津町の西弥護免遺跡、さらに阿蘇市の狩尾遺跡群・下山西遺跡(ともに黒川流域)などがあげられ、これらからはいずれも多数の鉄鏃を主として鉄器百点超が出土する。これら遺跡のある山地県境は、三世紀頃も、筑後川流域にあったとした場合の邪馬台国と狗奴国との国境地帯に近く、この一帯に鉄鏃を集中させるような軍事的緊張が続いたとの想定を、奥野正男氏の見解(同氏著の『鉄の古代史1 弥生時代』)を踏まえ、菊池秀夫氏も記している。現在の福岡県と熊本県の県境に跨るのが筑肥山地であり、その東側延長は大分県に及んでいて、この山地が弥生後・末期でも、二大勢力圏の境界線となっていたとみられる。境界線の南方でも、弥生後期頃に福岡県同様に菊池川流域を中心に環濠集落が多く営まれた。白川・緑川の流域や阿蘇南郷谷の南鶴遺跡(南阿蘇村)でも、環濠が見られる(南鶴遺跡からは、免田式長頸壺やジョッキ形土器、鉄鏃、小型銅鏡も出た)。

青銅器でも、銅鏡では熊本市の徳王遺跡、大津町の西弥護免遺跡などの連弧文鏡の出土がかなりあるが、別種の、

菊池市泗水町の古閑原遺跡(方格規矩鏡)や玉名郡和水町の諏訪原遺跡(八乳文鏡)から出た。銅剣・銅矛・銅戈・銅鏃の武器類や、巴形銅器(山鹿市の方保田遺跡、熊本市南区の宮地遺跡群・小銅鐸・銅釦なども出ている。これらの大部分は熊本平野以北の地域から多く出土し、阿蘇地方からも銅矛・銅戈が出た。熊本平野より南では、大型の青銅器は殆ど発見されていない(人吉盆地の多良木から細形銅剣が出たが、薩隅では僅少)とされるから、南部九州の薩隅とはこの辺も差異がある。熊本県内の弥生時代の遺跡数は約七四〇もあって、これは日本国内の約十三%を占める、とされる。

先に免田式土器について少し触れたが、熊本県では、弥生時代の後期・終末期には、中期末頃からの黒髪式土器(暗褐色の甕棺が主体)に続いて、免田式土器、野部田式土器という地域特色のある弥生土器が現れる。黒髪式土器は、白川下流北岸の熊本市中心区黒髪二丁目の黒髪町遺跡(この付近に飽田郡家が所在か)から出土したことに因む名で、黒髪I式は中期後半に、黒髪II式は後期に位置づけられる。この遺跡からは黒髪式土器や、玄界灘沿岸地域の北部九州の須玖式土器(弥生中期の土器)を用いた甕棺墓地が分布しており、近隣で白川南岸の神水遺跡(中央区神水・出水・水前寺あたり)などからも須玖式系統の甕棺が出土したから、この分布南限の宇土半島までは北部九州の影響も見られる。

免田式土器のほうは、もと「重孤文土器」といわれ、熊本地方の後期弥生文化を代表する。形は、胴部がそろばん玉の形のように、そこから上に長く開き気味に伸びた円筒状の首(長頸)をもち、胴部の上半面には、同心円紋を半分に切った紋様(重弧紋)やノコギリ歯状の鋸歯紋、平行紋などが描かれており、底部は丸底である。

その出土分布は、熊本県中・南部を中心とする南九州にあつて、これまで約一五〇か所で発見されており、うち熊本県は九五か所ほどを占める。特に球磨・人吉盆地では三十か所ほ

どあり、当初は、この地域が同様式の本場と推定され、見方から免田(球磨郡あさぎり町免田地区の本目遺跡)の地名に因る。この土器は、昭和前期に下益城郡隈庄町(城南町を経て、現・熊本市南区)から出土したものが報告されて注目を受け、先に大正期に人吉盆地の免田からの出土もあつて、『弥生式土器聚成図録』に免田式土器として記載され、この名称で一般化した。

その後考古資料の発掘・増加とともに、分布範囲の広がりも分かった。だから、用語としても、①重孤紋長頸壺という広い意味、②免田の本目遺跡から出土した土器と同時期の同種土器やこれに伴う土器群、という二種があり、この辺を明確にするほうがよいとされる。鹿児島県の北薩摩の大口盆地や熊本県の人吉盆地からも多く出ており、地下式板石積石室墓から免田式土器の変化した土器が出土した事情もある。

現在までに、重孤紋長頸壺が出土した遺跡は、旧下益城郡城南町を含む熊本市、上益城郡の御船町・益城町や宇土市など熊本地方に最も多く、最古形態のものもこの地域の熊本市南区の平田町遺跡から出た。だから、分布の源・中心はむしろ北の方のこちらで、「免田」の命名に拘るのは疑問がある。この種の土器の用途は、上益城郡御船町の南原A地点遺跡や同郡山都町の稻生原遺跡からの出土状態から見て、祭祀用の土器とみられる。緑川上流の山間部、阿蘇市の下山西遺跡でも、竪穴の中央部に祭祀的な姿で出土する。村上恭通氏も、祭祀的な使用が卓越したとみている。阿蘇谷やこれに東隣する大野川上流域(大分県域)からの出土もあるが、県北の菊池川流域になると急に少なくなるとされる。総じて粗っぽく言うと、「別府―島原地溝帯」あたり以南に多く分布する土器といえよう。

なお、熊本県外では、北九州の行橋市、佐賀県の鳥栖市・武雄市・吉野ヶ里遺跡、福岡県の八女市、南では種子島・奄美大島や沖縄本島の具志川市でも、ごく少数だが発見されて

いる。長頸壺が液体を入れるのに都合な器種で、舟・口土器・ジョッキ形土器という祭祀土器が弥生後期の熊本地方に同時にあつたという指摘(『新熊本市史』)もなされる。

野部田式土器のほうは、菊池川下流域南岸の玉名郡天水町(現・玉名市)野部田の際目遺跡から戦後、発見された一群の土器であり、模様のもたないものにつけられた名である。壺形土器に特色があつて、九州北部の影響があり、時期は弥生終末期頃とされている。その分布範囲は、北は菊池川あたり(玉名市、合志市なども含む)、南は緑川あたりで、東は阿蘇外輪山に限られた地域に集中する。

『新熊本市史』(佐藤伸二氏執筆)では、「現在の段階では、免田式は人吉盆地の弥生後期の土器群に、野部田式は菊池川流域の弥生終末期の土器群に限って使用したほうがよい」と指摘する。そうは言っても、これまでに発表の考古学的記述には種々混用されているので、読むときはその辺を念頭におかねばならない。野部田式は「野辺田式」と誤記される例もかなり見受けられる。

四 神水・二子塚の弥生遺跡とその周辺

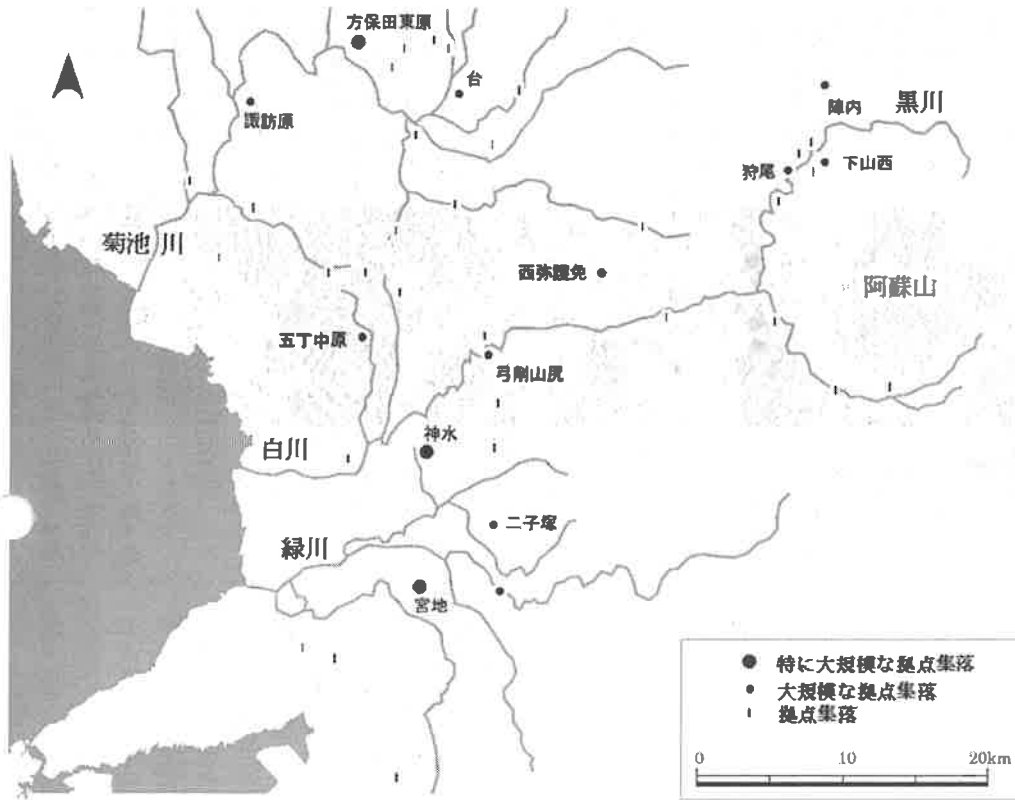
前項までに見てきた諸事情から整理すると、熊本県でも北から、①菊池川流域(中流部で環濠をもつ大集落の方保田東原遺跡が主拠か)、②白川・緑川の両流域、③人吉盆地という大きな地域ブロックで考えたほうがよさそうである。これら(とくに①と②)が一つの政治連合体を形成したとして、その主要勢力は白川・緑川流域にあつたのではないかとする見方に導かれる。免田式土器(重孤紋長頸壺)の北のほうの集中分布地域が、阿蘇谷から白川・緑川両流域にかけての帯にあるからである。村上恭通氏は、熊本独自の鉄鏃とされる「二段逆刺の無茎鉄鏃」の分布の中心も、白川・緑川両流域にあるとする。

跡に注目される。阿蘇の大鯉流着き伝承の地・鯉の東方近隣に位置し、江戸時代は鯉水永に含まれた。白川流域の西弥護免遺跡の西南方で、熊本市街地から見れば東南近隣にあたる。遺跡から二六七基の竪穴住居遺構が検出され、環濠内も含め二五〇点もの鉄製品や二基の鍛冶遺構が出た。掘立柱建物の遺構があり、野部田式土器も多数出て、勾玉・鉄鏃や内行文鏡の可能性もある破片も出ており、弥生後末期(V期)の遺跡とされる。時代は古墳時代に及ぶが、赤色顔料を塗布した石障や周溝への馬殉葬も見られる。ごく近隣には「足手荒神」があり、いま甲斐宗立も祀って甲斐神社と呼ばれるが、手足荒神という名も併せて熊本・大分・福岡諸県や四国、秋田県にも分布する。大山祇神など山祇族系の神が祀られたとみられる。

二子塚遺跡の南西近隣で、今は熊本市域となる南区城南町の宮地遺跡群にも、環濠があつて、巴形銅器・王莽銭(貨泉)や鉄斧・ヤリガンナ・刀子・鉄鏃なども出た。この城南町域では免田式土器が多数見つかつており、出土数や文様のバリエーションから見ても、熊本平野の南端部の緑川流域が分布の中心地ではないかと村上恭通氏はみている(二・三世紀の南九州における鉄の普及)など。

鉄器や鍛冶遺構、免田式土器という分布の観点からは、これら遺跡が評価されるが、北方の筑後川流域に都城があつたかとみられる女王国連合では、この流域に多数の鉄器を出す遺跡が知られない事情から考えると、狗奴国の国都のほうでも直接の係争地から少し離れていた場合にはさほどの鉄器遺跡・鍛冶遺構である必要はないことなる。その意味では、熊本市内の大集落遺跡も見てみる必要がある。

熊本市域には、北側に五丁中原遺跡(北区貞町・和泉町。環濠も確認)もあるが、まず留意されるのは熊本市街地の東北方に位置する東区弓削町の山尻遺跡群である。弥生時代を中心とした大集落で、白川中流の南岸に位置し(熊本空港の



西北西近隣)、西弥護免遺跡からも遠くない。当地からは、弥生期の小型倭製鏡(内行花文鏡。銘文なしの破片)も出た。これに近いのが西南方の熊本県庁の東側・南側周辺に広がる神水遺跡であり、弥生時代と奈良・平安時代を中心とした

複合的な大遺跡とされる。この遺跡の範囲は広いが、弥生期には掘立柱建物とよばれる建物跡がみつきり、なかに長辺が十メートル以上、幅が四メートル以上もある大型住居が検出された。同じ神水本町地内からは周溝も出た。このほか、土器を焼いた焼成遺構も見つかり、鉄器や鍛冶関連遺物も出土する。

弥生時代後期の拠点集落(熊本北部)……報告書『二子塚』掲載図に拠る

熊本県文化財調査報告第一一七集の『二子塚』に拠ると、村上恭通氏執筆部分では、二子塚や五丁中原・弓削山尻・西弥護免を「大規模な拠点集落」とみて、それより大きい「特に大規模な拠点集落」として神水遺跡とその南方の南区の宮地遺跡の二つをあげている。二子塚と神水・宮地両遺跡とがちょうど三角形を構成するようになっており、これら皆が緑川流域にほぼおさまる。縄文時代当時には、熊本平野の貝塚分布から見て現在の標高五メートル線が海岸線で、それより高い地が陸地であった、白川・緑川とも河口は更にながっていて東方に寄っていたとされるから、平野部はかなり狭く、上記三遺跡は海岸線に割合近い地点でもあった(『新熊本市史通史編1』)。これら三遺跡が狗奴国の主要域としてよさうである。

神水遺跡や方保田東原を
含む地域には、祭祀用のジョッキ形土器が重弧紋長頸壺と重複して分布している事情もある。括れた腰に薄帯の把手でシャープな形のジョッキ形土器は、東アジア最古の船着き場が発掘された沓岐の原の辻遺跡を経て、韓地の大邱までつながるから、狗奴国の外交はこの方面まで達していたともみる見方もある。

神水遺跡の東側の熊本市東区健軍町には、阿蘇四社のうちの健軍神社があり、阿蘇氏同族で火国造の初代という建緒組命を祀ること(本来の主祭神か)にも留意される。「風土記」の記事(肥前の本文及び肥後の逸文)には、崇神朝に肥後国益城郡の朝来名峰に土蜘蛛の打サル・頸サル(サルはケモノヘン十侯)の二人が居り賊衆百八十余人を率いて、「皇命」に従わなかったので、討滅したとある。「朝来名峰」とは、益城町福原の南部の朝来山(標高四六五M)かとされており、二子塚遺跡の東北東近隣に位置する。この「土蜘蛛」と言われる人々が狗奴国の残滓かということでもある。

朝来名峰の西方で、二子塚遺跡の西北近隣に位置するのが健軍神社である。火国造の嫡裔とみられる河尻氏は白川下流域に勢力をもち、重要支族の木原氏は宮地遺跡群の近隣に本拠があった。ともに、平安末期から鎌倉期に見える肥後の大族である。阿蘇にも菊池にもそれぞれ古族の血をひく中世大族があったから、肥後における、こうした三つの大きな勢力配置も無視できない。益城郡南部から宇土半島基部にかけては前方後円墳が多い。

山祇族の月星祭祀は妙見信仰にもつながる。狗奴国の末裔は姿を消して後に残らなくとも(狗奴国が九州を統合し、東遷して大和王権につながるという水野祐説は疑問大。古代習俗の不知に因る妄想)、熊本地方や八代市では妙見信仰が長く盛んであった。日本三大妙見の一つとされる八代妙見の祭祀が起こった素地も上古の狗奴国の存在にあったのではなかろうか。熊本では妙見信仰は水神信仰と結びつくことされ、

上記の地名「神水」の由来は、かつて神水泉と称する...があつたことに因るといふから、この意味でも神水遺跡に留意される。

（一応の総括）

これまでの邪馬台国研究のなかで、狗奴国があまりにも等閑にされてきたことを痛感する。また、水野祐氏のように、狗奴国の記事を過剰に多く考えるのも問題が大きい。文献と各種考古学資料を基に総合的に狗奴国を考えることが必要であり、最近までの発掘成果もあつて、それが次第に可能となつてきていると思われる。

七田忠昭氏は、近年の熊本地方の弥生時代後期の有力集落の発掘成果などから、倭女王卑弥呼が魏皇帝に緊迫感をもつて救援を願うほどの存在として、狗奴国が存在していたものと考えている。本稿でこれまで記してきた諸事情は、近年分かつたことが多い。これらから見て、熊本県の中央部・北部の重弧紋長頸壺の分布範囲が狗奴国の勢力範囲であつたとしつてよい。邪馬台国九州説のうえでかなり多数を占めてきた球磨川流域、とくに人吉盆地という説は疑問が大きい。これら肥後南部地域までを含めて広く熊本県全域を考える見方は、その辺までの影響力が狗奴国にあつたとしても、範囲が広すぎるといふこともある。

このようにみる場合の中心城が白川と緑川とに挟まれた神水遺跡及びその周辺域だ、とされそうでもある。菊池秀夫氏も、狗奴国の中心は、位置や生産力から推して白川流域の勢力だつたとみる(著書では具体的に触れないが、最近では益城町付近とみている)。狗奴国の存在を証明することにより、邪馬台国の存在を証明することも可能となるとの趣旨を指摘し、「九州北部の勢力が女王国連合、九州中部の勢力が狗奴国と考えられる」と菊池氏は記すが「邪馬台国と狗奴国と鉄」二〇一〇年刊)、狗奴国の具体的な比定地が多少違つたとし

ても、この言説がほぼ当てはまることも、併せて実感。ただ、その場合、青銅器・鉄器などの考古遺物よりも、祭祀・習俗に関連するもののほうを重視したいとも思われる。

最後に、本稿で取り上げてきた重要地域を含め熊本県・大分県と周辺地域が今回の熊本地震で大きな被害をうけたことに関し、心からお見舞い申し上げます。併せて、上古から火山や地震と共存してきて、そのなかで生活・文化を育んできた地域が力強く再建されることを強く願っております。

事務局だより

事務局長取材レポート

— 会員夫婦が経営する老舗旅館のご紹介 —

横浜市南区に明治十七年に創業された松島旅館という老舗旅館がある。当旅館のご主人と女将は夫婦そろって全国邪馬台国連絡協議会の会員で、設立総会にも参加してくださった。今回は、松島旅館と旅館のすぐ近くにある三殿台遺跡を紹介する。松島旅館は横浜市営地下鉄蒔田駅から徒歩三分のところにある。当旅館では近海の鮮魚を使った料理や、稀少な日本酒を堪能することができる。

松島旅館の島田女将は、パワフルな方で、様々な活動を行なっている。平成二十五年には「蒔田の吉良歴史研究会」を発足させた。吉良家は足利氏の一族で、東と西に分かれた。東の吉良家は室町時代に蒔田に領地を有し、「蒔田御所」と称する館を構えた。西の吉良家は吉良上野介義央が赤穂浪士の討ち入りで断絶となっている。松島旅館から徒歩三分のところにある勝国寺には供養塔が残されている。私も「蒔田の吉良歴史研究会」には設立当初からかかわっていたので会員になっている。平成二十六年に開催した第一回講演会では、私が紹介した上杉家十七代当主の上杉邦憲氏が講演を行なった。

吉良上野介義央の子、綱憲は米沢藩上杉家(養子に入り第四代藩主となっている。上杉氏は宇宙航空開発機構(JAXA)の名誉教授で、当会驚崎会長の知人であり、全国邪馬台国連絡協議会の設立総会の時に四者(上杉、驚崎、菊池、島田)はつながつた。平成二十七年に開催された第四回講演会では、全国邪馬台国連絡協議会の竹村理事が講演を行なっている。

さて、松島旅館から徒歩十分くらいのところにある高台に三殿台遺跡がある。当遺跡は縄文時代中期から古墳時代にかけての複合遺跡で、国指定遺跡となっている。当遺跡は昭和三十六年に発掘調査が行なわれ、約二百五十軒もの堅穴住居跡が見つかっている。

近年、当遺跡から出土した畿内系土器が注目されている。特にタタキ技法を使用した甕は畿内のタタキ甕に非常によく似ている。タタキ甕は東日本では非常に珍しく、関東では千葉県西部の一部の地域にしか出土していない。一方、当遺跡からは東日本に広く分布する東海系の土器がほとんど出土していない。

当遺跡が発見された当時は、まだ庄内式土器の研究はなされていなかった。現在は庄内式土器は纏向遺跡からたくさん出土しており、石野博信先生は纏向式土器の名称を使用している。纏向遺跡が邪馬台国の年代と一致するかどうかは別としても、また、三殿台のタタキ甕が畿内のどの年代と一致するかを別としても、東京湾沿岸の一部にだけ出土した畿内系のタタキ甕の存在は興味深い。

三殿台遺跡は邪馬台国の時代に存在していた。六月には三殿台遺跡を中心とした横浜探索ツアーを全国邪馬台国連絡協





※三殿台考古館パンフレットの地図を一部改修

議会で企画した。松島旅館で美味しい食事をいただきながら、女将の吉良氏の熱い話を聞くことができるかもしれない。皆様のご参加をお待ちしております。

旅館松島 百三十二年の不思議

旅館松島 女将 島田 紀子

創業は明治十七年(一八八四年)一三二年目に入っております。

現在島田姓ですが、初代は幕末小田原の家老で山本姓でした。廃藩置県で東京に呼び集められ当時一十九才、警察署長の職をあたえられた所までは先代から聞いていました。

本籍は東京牛込とあるのに、なぜ横浜で商売をしているのが最大の疑問でした。それを解き明かして下さったのが近年になって初代が立ち上げた3代目の真金町の床屋さん。松島さんが名譽図鑑に載っていると調べて来て下さいました。

板垣退助の片腕となり東京園追放 横浜に流れて来た所、横浜開港にて、江戸の吉原花街にという指令が出てい

う……

武士としての誇りもあつたとみえ、商人に身を落とす事は恥と思つたのでしょう。妹に山本姓を継がせ自らは、没した島田姓を起し商売を始めました。「武士は喰わねどの時代じゃない」と言つたとか、時代の切り替えも早かつたようですよ……。

生憎子供が授からず島根の森藩の家老に嫁いだ妹の次男(一五歳を養子とし二代目としました。三代目は娘の子孫、現在の女将島田紀子)を養女としました。

初代が別荘としていた蒔田の地は関東大震災でも太平洋戦争でも焼けず、家も壊れなかつたお蔭で二代目祖父は戦後蒔田に旅館として再建。私共の代ですべて建て直し平成三年から住まいも再度建て直し、料理処 松風苑とし、現在に至っております。

横浜が過去に二度にわたり九割焼失したにも関わらず、蒔田のこの地が被害に遭わなかつた事実は初代が大正五年に買い求めてくれた、眞葛香山初代作、「十一面観世音菩薩」のお蔭と「なんでも鑑定団」に出品した時に気づきテレビでお話してしまいました。再放送を含み三回も放映して下さいましたので、ご覧になられた方も多いかと思ひます。現在 宿泊宴会、修学旅行、各スポーツ団体等競技大会に上位の成績に残ると評判の縁起の良い旅館として知る人ぞ知る旅館になっています。

息子三人のうち長男がすでに松島の人事全般を見ており、三男は葉山の日影で九年小田原の右京で一年、間もなくラストパートで松島に戻る体制となっています。次男は店には入らないと労働組合のコンサルタントの会社に務め、名古屋支店で活躍、宿泊等が必要なお客様を、何軒か案内し営業もしてくれて心強い限りです。詳細はホームページ、女将のブログなどで検索下さい。

五月三日は蒔田の吉良歴史研究会事務局として国際行

列に地域の校長先生方十人仮装して頂き初参加、徳島池田から阿波踊り「吉野連」さんに夜行バスで来て頂き、三五万人の方々に見て頂き大満足でした。まだこの後も私共ができる何かを探し松島を通し、縁ある方々と共に喜んで頂ける社会を作つて行きたいと日々頑張っております。

事務局からのお知らせ

今回も短期間の応募期間にもかかわらず、多くの方からたくさん投稿をいただきました。ありがとうございます。毎回、原稿が集まるのか不安を持ちながらすすめているのですが、予想以上に集まるので充実して嬉しい悲鳴です。

さて、会報第二号は事務局の方針によりメールマガジンでの配信としました。ところが、会報が発行されると知らない人が続出。メールマガジンでの配布では限界があると判断しなおして郵便での配送に戻します。メール便が廃止されて残念です。

事務局の新サービスとして、在庫に余裕がある会報と大会資料集をご希望の方に配布します。

一、「会報二号」郵便切手二〇円を同封の上、左記住所までお申込みください。(在庫約三十冊)

二、「第一回全国大会」科学的年代論で解く邪馬台国」資料集 送料込みで一四〇〇円。(在庫約五十冊)

三、「第一回匈奴国サミット in 沼津」高尾山古墳と匈奴国の魅力を知る」資料集 送料込みで一四〇〇円(在庫約五十冊)

二と三は葉書、もしくはメールで住所・氏名・電話番号をお知らせください。代金は資料集に同封した振込み用紙でお支払い願います。

申込み先 〒二四五〇一三

横浜市泉区中田東三の十一の二 菊池秀夫

メールは zenyamaren@gmail.com

横浜の歴史探索会

横浜市の磯子区に「三殿台遺跡」という縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡があります。当遺跡を中心として磯子区・南区付近には意外と知られていませんが現代にいたるまでの歴史史跡・宗教施設が驚くほど密集して存在しています。今回の歴史散策会では、「三殿台遺跡」を中心としてこれらの施設を見学します。

邪馬台国時代のこの地域はどのような状況だったのでしょうか。「三殿台遺跡」は高台にあり、四方を見渡すことができます。古代の人達が眺めていた景色を想像しながら邪馬台国時代のことを考えてみませんか。

「三殿台遺跡」の概要報告は、神奈川県で活躍されている西川修一先生が遺跡の近くにある松島旅館で行ないます。当旅館は明治17年創業で、横浜で唯一残っている料理旅館で、女将とご主人の2人（島田夫妻）とも全国邪馬台国連絡協議会の会員です。当旅館での昼食後、「三殿台遺跡」の見学となります。



三殿台遺跡

●歴史探索スケジュール

集合

10:00

- ①弘明寺（横浜市最古の寺）
↓地下鉄で蒔田へ移動
- ②無量寺（源頼朝の子孫の寺）
- ③松島旅館にて西川先生の講演・昼食
- ④勝国寺（裏山が蒔田城・吉良一族ゆかりの寺）
- ⑤三殿台遺跡（縄文～古墳の複合遺跡）
- ⑥岡村天満宮（歌手ゆずの壁画が有名）
- ⑦龍珠院（伝説の龍の珠がある寺）
- ⑧真照寺（平子氏と平安時代後期の毘沙門天像が有名）

解散

17:00

●開催日時

6月18日（土）

10時～17時（終了予定）

*雨天決行（コースの変更あり）

●集合場所

京浜急行「弘明寺駅」改札

集合時間：10時（受付は9時半から）

*横浜駅から京浜急行各駅停車で6つ目、急行で3つ目

*横浜市営地下鉄の「弘明寺駅」とは別なので、間違えないようにご注意ください

●会費

一般の方：3,000円

全国邪馬台国連絡協議会会員：2,500円

*講演ガイド料・松島旅館での昼食代を含む

*現地までの交通費・地下鉄代（弘明寺～蒔田）200円は各自負担となります

コーディネーターと講師

三殿台遺跡

…… 西川修一氏、古屋三殿台考古館館長
平安から南北朝時代 …… 竹村理事
吉良氏関係 …… 島田松島旅館女将
宗教・パワースポット …… 菊池事務局長

◆◆全国邪馬台国連絡協議会 第3回九州地区大会◆◆

倭人伝の国々～王たちの登場～

【日時】平成28年6月4日(土) 10:00～16:30(開場9:30)

【場所】九州国立博物館・ミュージアムホール(定員288名) 〒818-0118 福岡県太宰府市石坂4-7-2

【講演会受講料】一般2,000円 会員1,500円 高校生以下無料(資料代含・お支払は当日受付にて)

【講演会スケジュール】

- ①「**奴国の王**」大野城市教育委員会 澤田 康夫氏(10:05～11:00)
- ②「**伊都国の王**」伊都国歴史博物館 岡部 裕敏氏(11:05～12:00)
- ③「**朝倉の王**」朝倉市教育委員会 川端 正夫氏(13:00～13:55)
- ④「**倭人伝の時代の南筑後**」八女市新社会推進部 檀 佳克氏(14:00～14:55)
- ⑤「**邪馬台国と地域国家**」旭学園理事長 高島 忠平氏(15:00～16:00)

●共同主催:全国邪馬台国連絡協議会九州支部/ふくおかアジア文化塾/九州・アジア文化芸術フォーラム

●後援:九州国立博物館/福岡県文化団体連合会/太宰府市教育委員会/太宰府市文化協会

●協賛:太宰府天満宮/株式会社 原書房/株式会社 梓書院/株式会社 海鳥社

|懇親会|終了後、懇親会を開催します(希望者) 参加費:6,000円

バスツアー 板付遺跡～裂田溝(那珂川町)～伊都国歴史博物館(糸島市)～平原遺跡
～鎮懐石八幡宮(糸島市)等

6月5日(日) ※定員25名 参加費:7,000円

◆◆全国邪馬台国連絡協議会 第3回全国大会◆◆

中四国大会 in 米子

日本古代史研究のリスタート(再出発)

【日時】平成28年10月29日(土) 13:00～

【場所】米子市文化ホール

【講演会スケジュール】

第1講演「日本古代史研究のリスタート」

田中 文也氏:全国邪馬台国連絡協議会副会長

第2講演「日本旧石器研究のリスタート」

成瀬 敏郎氏:兵庫教育大学名誉教授、砂原遺跡発見者

第3講演 考古資料から読み解く記紀と風土記

松本 岩雄氏:島根県八雲立つ風土記の丘所長

古代史検証ツアー:記紀の現場を歩く 10月30日(日)

「高天原～高千穂～葦原中国～根堅洲国～黄泉の国をめぐるツアー」など